
こてつ物語10

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こてつ物語10

【Nコード】

N4051V

【作者名】

yuki

【あらすじ】

こてつ物語の十話目。

御子が出産し、礼似が組長に就任して一カ月。香は真柴組に足げく通いだし、礼似は連日組に泊りこんでいる。そんな中、御子達や由美が訪れたデパートが、突然爆破される。御子達は閉じ込められてしまい、そこで御子は犯人の思念が流れ込んで来たのを感じ取った……

このお話は、自らのブログと同時進行で連載させていただきました。

1（前書き）

お断り　今回のお話には、建物爆破シーンや、倒壊シーンが含まれます。今は相応しくないと御不快に感じる方もいらっしゃるかも知れませんが、そういうシーンを望まない方は申しわけありませんが、ご遠慮していただきたいと思います。2011年8月19日現在、まだ、強い地震が起こっていますからね。

主な登場人物

由美　こてつという名の柴犬を飼う、ちょっと（？）天然な奥さん。本人は普通の主婦だが、実は夫が街を牛耳る「こてつ組」会系の会長で大親分。ただし、どんな事があるうとも由美は夫の正体に気づく事がないらしい。会長の命で、こつそりと土間、礼似、御子の三人の女に守られている。

こてつ　由美と会長の飼い犬。柴犬だが、その風貌は焼き物の狸によくたとえられる。やることなす事人間臭く、由美が溺愛しており、人の子と変わらない扱いをするせいで、人臭さに一層拍車がかっている。ホントに自分を犬だと思ってないかも。

会長　「華風組」「真柴組」「こてつ組」の三つの組を仕切る、「こてつ組」会の会長。泣く子も黙る大親分だが、由美とこてつを溺愛している。由美やこてつの身に何かある事と、由美に正体を知られる事を何よりも恐れている。

通称ドレミ三婆（笑）

土間　ドレミのド。昔、剣術の師匠と妻を次々殺され、生き方を変えるために性転換した元男性。妻との間に「ハルオ」と言う息子がいるが、身の安全のために真柴組に預けてしまった。我が手で

ハルオを育ててやれなかった事を悔いている。現在、華風組の女（？）組長。

礼似　ドレミのレ。殺し屋の父と、礼似と瓜二つな詐欺師の母を、元恋人の一樹に殺されている。若い頃は暴走族の女リーダー。詐欺も得意だが、一樹と美人局まがいの事をしていた事もある。香という妹分を唯一の家族と思って暮らしている。最近、こてつ組の組長に就任した。

御子　ドレミのミ。神社で拾われて育った後、真柴組に引き取られた真柴組長の養女。人の心を見通せる、千里眼をもっている。同じ組の次期組長、良平と結婚し、最近娘の真見が生まれたが、真見も千里眼をもっている。

ハルオ　真柴組の若い組員で、なにを言うにも何故かどもってしまふ癖がある。お人好しで最近まで刃物を持てなかったが、父親譲りの才能はある。香の恋人。

香　礼似の妹分で、礼似同様父親は殺し屋だった。母は腕利きのスリ。その血を継いでスリの腕と、素早い動きを見抜く目を持っている。刀研ぎの修行中。

良平　真柴組の次期組長で、御子の夫。抜群のドスさばきをもっているが、片足が義足。だが、特殊な義足を使いこなすため、喧嘩の腕っ節は強い。

一樹　礼似の元パートナーで、恋人だった。礼似の両親に自分の両親を殺されているが、一樹もその仇を討っている。礼似に命懸けで足を洗わされ堅気になったが、会長に呼び戻された。

夕暮れ時の真柴組で、香はサトイモの皮をむきながらハル才に訊ねた。

「煮物の具、足りなくない？」

ハル才は炒め物用の野菜を刻む手を止め、下ごしらえの済んだ野菜を確認した。

「す、少し、こ、こんにやくでも、た、足そう」

そういいながら冷蔵庫からこんにやくを引っ張り出して来る。

「そっち、もう終わる？ 私そろそろ行かないと」香は壁にかけられた時計の時間を気にしていた。

「あ、も、もういい。あ、後はやるから」

「そう？ じゃ、私行くね」

そういいながら香は手早くエプロンを外すと、バックを片手に御子のいる部屋に声をかける。

「じゃ、私出勤しますんで。あとはハル才とお願いしまーす」

そういいながら玄関へと向かう。

「はい。ありがとうね。香」

御子は奥の部屋から生まれたばかりの娘を抱いたまま、香に礼を言った。

「いいえー。また明日」

御子の出産から一カ月。香は午後になると真柴組に夕食の下ごしらえを手伝いに来るのが習慣になってしまっていた。

出産直後の御子を気づかっていたの事もあるのだが、こうでもないとなかなかハル才と会う機会も取れなくなっていたのだ。

香は夕方から深夜にかけて、あの料亭で今も仲居をしている。ハル才も昼間はたこ焼き屋の仕事、その合間を見ては真柴組の雑用や家事をこなしている。

もともと便利に使われていたハルオだが、この所、御子は娘の面倒にかかりきりになってしまい、組の実務と、子育てだけで精いっぱい。家事や雑用は一層ハルオに頼るようになっていた。

けして多いとは言えない真柴組の組員だが、少ないとも言い難い。住み込みの若い者も多いので、雑用は山とある。人の良いハルオは御子の負担にならないようにと独楽鼠のようにせつせと働く。

ハルオがようやく息を付ける頃には香は仲居の仕事の真つ最中。

おまけにたこ焼き屋は土日や休日の方が忙しい。香も週末の夜は大忙しだが、日曜休みも多かった。

つまり、二人は結構すれ違いの多いカップルになったわけだ。

そこで香は午後になると料亭に出勤する前、真柴に夕食の下ごしらえの手伝いをしに来るようになった。

それに合わせてハルオもたこ焼き屋の仕事から、一旦組に戻ってきて、香と共に台所に立っている。そして支度を終えてから、また店に戻って行くのだ。

全くの私用なので（今までだってほとんど私用だったが）事務所を通らず、自宅用の玄関の方へ向かうと、御子も娘を抱えて部屋を出て来た。

「ほら、真見。お姉ちゃんに行つてらっしゃいましょうねー」御子がまだ、首も座らぬ娘の手をもって香に向かって手を振らせる仕事をする。

香も靴を履きながら振り返り、御子と赤ん坊に向かってひらひらと手を振り返しながら出ていった。

結局良平と御子の娘には「真見」と言う名がつけられた。

組長は最後まで両親どちらかの字を入れる事を望んだが、

「自分の力の良さを信じて、受け入れる事のできる子に育ってほしい」と良平に言われれば、実の親のそういう願いを無視して押し通すわけにもいかず、とうとう折れた。

「女の子の名前には華やぎを」と言っていた御子だが、いざ、名前を付けてしまえば呼びやすく、耳になじみやすい名前は感じがいいと考えが変わったらしい。

「今となつては『真見』意外に考えられないわ」などと まだ名前を付けてから三週間ほどしかたっていないのに都合のいい事を言っている。

何だかプレッシャーも与えそうな命名だが、真見が千里眼であることは確定的なので、これ以上この子を現している名前もない事だし、いっそ、名前ごと自分の個性(?)を受け入れてくれた方がいい。ようは真見に、自分の力と名前への誇りを持たせてやればいい。

良平と御子は、自分達にその覚悟を促す事も含めて、その名を付けたようだ。

そうはいつでも、真見はまだ生まれたての赤ん坊で、思考も感情もまだまだ未発達。何処にでもいる乳飲み子とそうは変わらない。育てる御子や良平だって新米の両親だ。

ちょっと違う点と言えば、御子は真見が泣きだす前に、どうして欲しいのか察しがついてしまう事。これを警戒して良平は御子に「赤ん坊が泣くのは当たり前。真見がはつきりと泣き声を上げるまでは手を出すな」ときつく言っている。

どんな人間でも自分の事を察してくれると真見が勘違いしないよ

うに……と、本人は言っているが、半分くらいは真見に対する御子への嫉妬が混じっているんじゃないかと御子は思っている。

男親はどうしたって母子のつながりにはかなわない。それだけでも寂しいのに御子と真見は共に感情を共有できる有利さを持っている。

それでも娘可愛さのあまり、良平としては真見への愛情が御子に負けていない事を、愛娘に何とか伝えたいらしい。真見に関しては躍起になって機嫌を取ろうと奮闘している。

つまり、心配事はまだ先の話。夫婦そろって、娘の愛情の取り合いに夢中になっているのだ。

組員達も真見には夢中になっている。

ただ、こちらの方は子育ての義務も責任もない。生まれたての赤ん坊なんて、めったに身近に見る事のない彼らだ。

真見がなにをしても、どんな表情をしても、珍しく、面白くて仕方がないらしい。絶好のおもちやだ。

彼らが興味シンシンであやそうとしたり、突っついて見たりしたがるのは、遊んであげているのではなく、彼らの方が真見で遊びたがっている。そんな事は誰の目にも明らかなので、良平は必死で睨みを聞かせている。殆んどそれが良平の子育ての義務だと思っているらしい。

どうせなら、おむつ替えや、着替えなんかを率先してくれればいいのに……と、御子は思うが、なかなかそう、都合良くはいかないようだ。

それに真見の遊び相手なら、誰にも譲らない人がいる。組長だ。

この時期の赤ん坊なんてほとんど寝てばかりだと言うのに、ちらとでも目を覚ましはしないかと組長はじりじりと真見の目覚めを待っている。こうなると真見の睡眠を守ろうとする良平とのにらみ合いだ。

なんだかんだ言っても、今、真柴は平和なようである。

香が毎日真柴に足を運べるのには、もう一つ理由があった。礼似が忙し過ぎて部屋にほとんど帰らないのだ。

あの幹部会の後、礼似は正式に組員達に披露され、こてつ組の組長に就任した。

就任したと言っても、どの派閥にも属さない礼似の事、体制を整えるだけでもひと仕事。礼似自身だつて付け焼刃の知識で幹部達とのやり取りが続く。いくら大谷と一樹がいると言っても、任せっぱなしと言うわけにもいかないのだろう。

たまに帰って来たつて、コンビニの弁当をかきこんでシャワーを浴びるとベッドにもぐりこんでしまう。

心配して声をかけても、

「悪いけど今は睡眠の方が大事。あんたにかまう余裕はないの。ハルオのところにもも行つて」

そう言つてすぐに眠りこんでしまう。こっちはすれ違いなんてレベルではなく、全くとりつく暇がない。

会長の奥様も、会長の就任直後はこんな気分だったのかなあ？

あの奥様の事だから仕事の内容を知らないながらも、律儀に会長を待つて面倒をみていたんだろうな。

香はそんな事を考えて感心したりはするのだが、別に礼似が自分の夫と言う訳ではないので、いつ帰つて、いつ、口を利くか分からない相手を、ご丁寧に待つ気はさらさらなかった。

それに礼似にはこの間いいようにならなかつた。

先日ハルオに少し時間が出来て、久しぶりに部屋まで送ってもらったのだが、その時礼似から電話があつた。部屋でハルオと一緒にだと言つと、

「それはいいけどさあ、その部屋、私がいらないと思ってホテル代わりに使うんじゃないわよ」

と、大声で言われてしまった。

ハルオにさえも聞こえてしまい、

「だ、大丈夫です！ す、すぐ帰ります！」と、ハルオは叫びながら飛びあがり、慌てて部屋を出て行ったのだ。

勿論、ハルオがそんなことのできるタイプじゃない事を百も承知でからかっている。ハルオの叫びも向こうに届いたようで、礼似が笑い転げる声が電話から聞こえていた。

多少は香に対して釘を刺すつもりもあつたのだろうか……香もそれは分かったのだが、

そこまでするか？ 普通。

礼似さんにフツーを求めてもしょうがないか。死ぬほど疲れるような日が続いても、イタズラ心だけはどうかやう健在らしい。無駄に心配し過ぎても損だ。

礼似さんが前に帰ってからもう、三日ほど経つから、そろそろまたもどるのかもしれないが、殆んど眠りに帰るだけになるのだろう。いいや。部屋には戻らずに、このまま真っ直ぐ出勤しよう。

こんな調子で香の方も、部屋には身体を休めに帰る程度で、頻繁に真柴組に顔を出す日々が続いていたのだ。

「おはようございます」

香はいつものように挨拶をして、更衣室に向かう。和服に着替えて化粧をチェックする。

普段、香はわざと化粧をしなかった。顔の傷を堂々とさらして歩いている。この傷は香にとっては勲章だから。

しかし客商売の料亭で、そんな姿で仕事をする訳にもいかないの

で、仕事中はカバー力の強い、少し濃いめのメイクをしている。和服なら多少濃くても違和感はなく、傷はほとんど目立たなくなるのだ。

「よっし、落札額に問題は無いようね。例の企画会社へのリベートは二割半の予定だっけ？」

礼似はこてつ組の組長室で、書類の束をかきわけながら大谷に聞く。

「そうだ。こっちのわがままに付き合わせた割には、抑えた額で承諾してくれた。その代わり諸手続きの際の役人への圧力はきっちりかけておくが」

大谷が礼似の探していた書類をサツと取り分け、渡しながら答える。

「そうみたいね。でも、ここは三割に上げて。あっちに他意は無いのは分かっているけど、カネの事でケチらない方がいいわ。今後のために色を付けたってことにしておいて」

礼似が金額にペンでチェックを入れた書類を一樹が受け取る。

「分かっているさ。そのために最初の額を抑えたんだ。トータルではほぼ予定通りの額に収まったが、広告会社はウチの息のかかっている所を使わせた。あそこはウチへの上納金もいいから、ウチにとつてはむしろプラスになった」

一樹はその書類をファイルに挟みながら言う。

「さすがにあんた達は抜かりがないわ。でも、これでようやく一段落ね。大谷、御苦労さま。もういいわよ、あんたも自分の舎弟達の事が心配でしょ？ 顔、出して来たら？」

礼似はちらりと一樹の顔を見てから、大谷にそう促す。どうやら一樹に大谷抜きでの話があるらしい。

大谷も二人の昔の仲は知っているので、特に追求する事もなく、「そうだな。じゃあ、組長。また明日よろしく願います」と、形ばかり軽く会釈をして部屋を出た。

「で、香の周りは問題ない？ 組で余計な動きは無さそう？ ……
大谷の舎弟達も」

大谷の足音が離れて行ったのを確認して、礼似は一樹に聞いた。
「問題ないね。これだけお前の足場が固まってしまえば、香を使つてどうしようなんて気は起きないさ。なんせお前は会長さえもこき使うんだ。さすがは美人局の礼似、会長にまですり寄って落とせるんだから大した女だ。組長の地位まで手に入れやがったって噂がすっかり広まってるのさ」

「はんっ！ そんなもんで組長の地位が手に入って思ってるんだ？ おめでたいわねえ。いつからこてつ組の組員って、そんなに質が落ちたのかしら」礼似はやや、あきれ顔だ。

「そりゃ、お前が女だからさ。半分以上、やつかみだよ。こんな世界だ、女に指図されるなんて、癪で仕方がないのさ。だからお前が実力でのし上がったなんて誰も思いたくない。女の武器に敵わなかったんだって事にしないと、沽券に関わると思ってるのさ」

「別に実力なんてないけど。コケンねえ……。そういえば会長はあの料亭の女将とも色々あるって噂が立ったけど、それも多分女将の実力に嫉妬して誰かが流したんでしょね。会長、奥様にベタ惚れだもの。考えられないわ。あの女将もかなりの切れ者だし」

知らぬが仏。会長の実際の顔を知るものなど多くは無い。会長の由美やこてつに対するオロオロぶりを見たら、皆、驚き、あきれるところだろう。

「そんなもんさ。男の発想なんて単純なもんだ」

「単純だからいいように扱われちゃうのに。まあ、その方が可愛げはあるけどね。でもこの分なら香の事は安心だわ。ハルオとの付き合いもいい方向に事が運んでいるし」

「いい方向？」

「その女将からこの間、電話があってね。香の手くせが、すっかり影を潜めたみたいなの」

「ほう？」

香のスリの腕前は一樹も自らナイフを知られてよく知っている。

「手くせなんて、大抵は何か満たされない事が引き金になって起きるのよね。香は母親譲りの腕を持っているから余計に手が出やすいんだろうけど、コントロール出来ない訳じゃない。それでも仕事中に手が出ていたのは精神的なものがあつたんだと思う。若い娘にはありがちな事だしね。でも、律儀者のハルオとの付き合いで、かなり安定したみたい」

「良かったじゃないか」

「そう、良かった。ここひと月で香と真柴組との距離も縮まつたし。御子達にとっても香は家族のような感覚になつたはずだわ。私もひと月くらいでそう思つたもの」

礼似の目がふと遠くなつた。香が部屋に押し掛けて来た頃の事を、思い出しているのだろう。

「礼似、お前わざと連日ここに泊りこんでいたのか？」一樹がその目をのぞきこむように見て聞いた。

礼似は少し、躊躇した。

「まあ……ね。今の私の身じゃ、香がそばにいたからって守つてやれるとは限らないし、あの子の生い立ちや境遇を考えたら、真柴の方があつてと思うしね」

「香を真柴にやるつもりか？」一樹は真つ直ぐに聞いてきた。

「このままハルオとの付き合いが深まれば、自然にそうなるわよ」

「その割に、きっちり釘は刺していたな。あの二人が、そう、軽い付き合いをする事は無いって分かっているはずだろ？」

香に電話した時には一樹もそばにいた。その時の事を言っているのだろう。

「あれはハルオをからかっただけよ」

「何の意味もなくか？ お前らしくもない。香を真柴にやる気ならハルオとの付き合いが深まつた方が、かえって都合がいいはずだろ

う？」

「何が言いたいのよ」遠回しな言い方に礼似はいらだった。

「香はお前に懂れてこてつ組に入っただろ？ ハルオとのよほど強いつながりがなけりや、そう簡単にこてつ組から……お前の元から離れることは無いんじゃないか？」

「そんなことないわよ。あの年頃の娘が姉貴とオトコを比べたら、オトコを取るに決まってんじゃない」

礼似は吐き捨てるような口調になった。

「なあ、つまない意地を張るのはよせよ。お前、ハルオに嫉妬してんだろ。本当はお前の方が寂しいんじゃないのか？」

「私、そっちの趣味は無いんだけど」

「ごまかすな、っての。香はお前にとつてやつとできた家族だ。お前には他に家族と呼べる人間はいない。香に安定した場所を与えてやりたいのも本音だろうが、いざ、離れそうになると寂しくて手放し難くなる。違うか？」

礼似はついに黙り込んだ。一樹に礼似の嘘は通用しない事は分かっているし、一樹だって知っている。

「まるで娘を嫁にやる、父親みたいだな」

「あんまり人をからかわないでよ」

「からかつちやいないさ。俺だつて泉を嫁にやる時は寂しかった。なまじ血がつながっているだけに往生際が悪かったんだ。相手の男の方が、ずっと長く泉を見守っていたのにな」

「そんなの、時間の長さの問題じゃないわ」

一樹は軽く首を振った。

「時間だけじゃない。俺は泉を一度は見捨てている。血のつながりに甘えて。あつちはその間中泉に寄り添っていたんだ。違いは明白じゃないか。それでもいざとなったら手放すのがつらくなったんだ。タチが悪い」

「たしかに、弱虫ね」

「だろ？ そんなもんなのさ。お前もあんまりハル才をいじめるな。相手がお前じゃ、ちよつとキツそうだ」

「香の邪魔はしないわよ。……確かに寂しいけど。でも香のためだわ。この間のノート的一件みたいな事もあるしね」そう言って礼似は軽いため息をつく、が、声を一転させて、

「あー、でもあのノート。華風の上納金がらみの情報は、ちよつともったいなかったなー」

と、未練ありげに嘆いた。

「お、そう言うんなら、いるか？ あのノート」

「え？」

「あのノートなら、俺が持つてる」

「ええ？ だってあの時始末してって……」

「だから始末したのさ。俺の部屋の中に。お前、どういつふうに始末しろとは言わなかっただろ？」

一樹は何でもない顔をして答えた。

「なに危なっかしい事してんのよ。あんなものが情報屋の手のうちにあるって華風の連中に知られたら、すぐにつけ狙われるわよ」

「情報屋だから、ああいうものには敏感でね。それに、物を始末したつてもう遅い。俺、頭の中に叩き込んだ」

「うっ……」素早いと言うか、はしっこいと言うか。

「それにどうせ、お前もあらかた頭に入れてあるんだろ？ 何かの形でバックアップも取ってあるだろう。お前の方が立場を考えたらよっぽど危ないじゃないか。こうなったら一緒に抱えてやるよ」

「誰もそんな事頼んでないのに」

「なあに。どうせお前とはここで一蓮托生だ。ちよつとおまけが増

えるくらいかわわない。お前こそ女組長なんて目立つんだ。抱えるのは組員だけにして、こういう事はこっちに回せよ」

「急に女だった事思い出したように言わないでくれる？」

「急じゃないさ。誰が野郎のためなんかに、ここまで体張るもんか。会長にも恩は返したしな。なあ、香を真柴に預けたら、お前、俺のところにはこないか？」

「は？」礼似が目を丸める。

「もう、一人暮らしもつまらないだろ？ それとも、まだ、俺が親の敵にしか見えないか？」

「……その持つて行き方は、そうとうズルいと思うんだけど」

礼似は昔、一樹に両親を殺されている。が、もう恨みは無い。大体礼似の両親だって、一樹の両親を一樹の目の前で殺している。一樹は親の仇を打ったにすぎない。恨むのは筋違いってものだろう。それなのにこの質問の仕方では否定しにくくなってしまふ。

「ズルくて結構だ。こういう時は口説き落とした方が勝ちさ」

「何が悲しくて今更あなたに口説かれなきゃならない訳？」

「ミも、フタも無い言い方するなよ。それにさっきも言ったぞ、つまらない意地を張るな。見当はついてるだろう？ 香を手放したら、オトコを手放す時より堪えるって」

「一樹でその埋め合わせをしるって言うの？」

「今の俺なら昔より少しはマシだと思うが？ ようは気がまぎれりゃいいんだよ。組長なんて、なればそれだけで孤独になるんだから」
そう言いながら一樹が礼似に寄り添った。

「もともと一人だったんだもの。そのうち慣れるわよ」

「まあ、黙ってるって……」そう言って礼似の唇に指を触れ、顔を近づけていったが……

「ぐほっ！」

一樹は思わず声が出た。腹部のだ真ん中に礼似のこぶしが見事に命中している。腹を抱えて足から身を崩した。

その背中を礼似は平手でバンバンと叩く。

「うん、ちゃんと鍛えてるわね。サンドバッグがわりにはなるかも確かに気晴らしにはなるわ」

礼似がそう言っている間も一樹は息が出来ないらしく、ゲホゲホとせき込んでいる。その姿に背を向けて礼似は出入り口のドアへと向かって行く。そして振り返ると、

「サンドバッグでいいなら、少し考えてみてもいいわね。検討しておく。じゃ、今日は部屋に帰って寝るわ。また明日ね」

そう言いながら礼似はさっさと部屋を出ていった。一樹は呼吸がなかなか戻らない。

あいつ、思いっきり殴りやがった！ 何とかみぞおちは避けられたが。いや、あいつがわざと狙わなかったんだろうか？ どっちにしても遠慮する気は無かったらしい。あいつ、自分が馬鹿力だって事、忘れてんじゃねーのか？

だが、「検討しておく」か。意外にダメもとで迫ってみた効果はあったようだ。

これからこの組の中で礼似は、会長に次いで孤独な立場になる。あいつだって分かっているだろう。そんな時に香を手放すのは想像以上にしんどいはずだ。俺でさえ情けないがこっちの世界に戻ってしまった。あいつじゃもつと逃げ場がないだろう。さすがの礼似でも動揺はしているようだ。

本来のあいつなら、このくらいの事は慣れ切ってる。もつと簡単にかわしたはずだ。これは礼似としてはかなりの過剰反応だ。こん

なに本音が見えるとは正直思わなかった。

少しは昔の気分を思い出したのかもしれない。まだ、可愛げが残ってるじゃないか。ただ。

はあ、っと大きくため息をつく。ようやく呼吸が戻ってきた。

「ちよっとは手加減しろよなー。仮にも昔の恋人なんだから……」
ようやく出るようになった言葉で、一樹は思わず愚痴ってしまった。

礼似は幾分軽くなった気分で部屋に向かっていった。

一樹だったら、あいつ、わざと私のこぶしをよけなかった。最近の動きを見れば、十分昔の感覚は取り戻していたはずなのに。バカねえ。真正面から受けるなんて。

一樹が避ける気なら避けられるのが分かっているから、私も思いつき殴りかかった。おかげで本当にスッキリした。実はこのところ、結構ストレスが溜まっていたから。

それなのに、全く避けるそぶりさえ見せなかったって事は、私が殴るんなら理屈抜きに受け止める。いつだって私を受け入れるつもりがあるってことなんだろう。

相手をやり込めようって時には実に良く回るあの舌が、こういう時には急に重くなる。結局態度に表すしかない、あいつの意外な不器用さは今も変わっていないらしい。

とりあえず気持ちだけは受取っておこうか。気弱になって頼る気持ちが起こっては厄介だけど、やっぱり身近にこういう存在がいてくれるのは、決して悪い気分じゃない。

マンションの部屋の前で鍵を取り出しながら、ふとつぶやく。

「あれ、明日にはアザになってるんじゃないかしら？」

まあ、しょうがないか。あっちが好きで避けなかったんだから。キスマークの代わりだと思って我慢してもらおう。たいして変わり

や、しないでしょ。

一樹が聞いたら頭を抱えそうな事を考えながら、礼似は部屋に入って行った。

「智、風呂は沸いてる？　今日は早めに用意しておくように言っておったわよね？」

土間は玄関で靴を磨いている智に声をかけた。

「はい。沸かしてあります」智は相変わらずのむっつり顔で答えた。智はこの華風組に来てからと言うもの、ずっと機嫌が良くなかった。それはそうだろう。ここにきてからと言うもの、毎日雑用に使われてばかりいるのだから。

本当は刀の素早い使いこなし方を教わって、誰よりも強くなりたがためにこの門をたたいたと言うのに、刀を教わるどころか稽古場に近寄らせてももらえない。

いや、彼はここに組員として受け入れられてさえいなかった。組長である土間が、自分と杯を交わさなければこの組員にはなる事が出来ないのだ。

どうにかここに置いてもらってはいるものの、いまだに自分は居候扱い。朝の掃除のとき以外は事務所にすら入れてはもらえない。

やらされるのは掃除や洗濯、組に係のある店への伝達や使いに出されるような事ばかり。それさえも店の裏口で従業員に頭を下げ、時には野良犬のように追い返されたりする。相手にどんなに尊大な態度を取られても、決して口答えをするなときつく言いつけられている。出来なければすぐ、ここから追い出すと言われてしまう。

街の不良で通っていた時は、それでもそれなりに「顔」が通用した智だったが、華風組に来てからと言うもの、誰に対しても頭をさげっぱなしで、ロクに存在を気に留めてさえもらえずにいる。これで機嫌がよくなれるはずはなかった。

「そんなふてくされた顔で返事しないの。今夜からあんに雑用係より、マシな仕事を覚えさせるわ」

「え？」

智は心が躍った。やっと組員として認めてもらえるのだろうか？
「智、あんた、アツシさんの仕事をよく、観察しなさい。彼はウチの懐刀。彼の仕事を見ていれば、ウチの方針や幹部達の考え方がよく分かるはずよ」

膨らんだ期待が一気にしぼむ。自分がここに求めている事はそんな事じゃない。そう、言葉にしたいのは山々だが、自分はこの組員としてさえ認められていない。組長の温情でここに置いてもらっているだけの身だ。この人に出て行けと言われたら、今までの我慢は水の泡になってしまう。

「観察と言うと、俺、アツシさんに付いて歩いていればいいんですか？」

「そう、アツシさんの言う事をよく聞いて、なるべく彼の役に立つように行動しなさい。いわば、カバン持ちつてところね」

雑用係よりマシになっても、所詮はカバン持ちか。これじゃいつ、組員になれるのだろう？ いや、たとえ組員になれなくてもいいから、ドスや刀を握らせてもらいたい。しかし、刀嫌いのこの組長じゃ、そんなのいつになるか分からない。もしかしたらアツシさんに取り入った方が、事は早いかもしれないな。

「分かりました。アツシさんのお手伝いをします」

「あら？ 案外素直ね。じゃあ、今日はあんたが先に風呂をすませなさい。今夜アツシさんは料亭で土木関係者と会うからあんた、そこについて行くのよ。くれぐれもアツシさんの顔を潰すようなことのないようにね」

「俺が先に風呂、使ってもいいんですか？」 普段は智が一番最後に使っている。

「相手方に失礼のないようにしなきゃならないからね。ちゃんと髭も剃っておくのよ。さあ、早くして」

きつちり小言も聞かされて、智は土間に風呂場へと追いやられた。面倒だが仕方がない。組長を説得してもらえるように、まず、ア

ツシさんから先に味方になってもらおう。

自分の卑屈さ加減が少々嫌になるが、智は土間に言われたとおり、アツシのもとに従う事にした。

「せ、せっかく、は、初めて、お、親子三人で出かけるんだ。ゆ、ゆつくりしてくれば、い、いいのに」

ハルオは御子にそういったが、

「乳飲み子抱えてると、そう言うわけにもいかないの。すぐに帰るから、あとをお願いね」

そう言って御子は良平と共に駅前のデパートに向かった。

出産祝いのお返しや、お礼はみんな済ませていたつもりだったのに、あらためて確認し直すと、数件だけ漏れがあった事に気がついた。

ネットショッピングやカタログから選んで注文してもよいのだが、このところ組の周辺しか出歩く事のなかった御子が、

「ねえ、お宮参りも近いし、思い切って真見を連れてデパートまで出かけてみない？」と、言いだした。

確かにこれから長い子育てだ。こういう機会に息抜きをする癖を付けておいた方がいいかもしれない。この子を育てるには何より御子の精神状態が健康であることが一番大切な条件になるのだから。

組長も良平も、御子が余計な負担やプレッシャーを感じることなく、真見を育てる事の大切さを分かっている。むしろ、御子が真見のことしか頭に無くならないようにしているのはいいことだ。二人とも二つ返事で賛成した。短い時間とはいえ、良平は初めて三人での外出も楽しみだ。

そんな訳で、御子と良平は真見を抱いて、駅前のデパートまでやってきた。

必要な品は贈答品コーナーで簡単に決めた。本当ならすぐにでも

帰れるのだが、二人とも気になる売り場があった。上階にある、子供用品売り場だ。

夜ではあるが、デパートの閉店まではまだかなり時間がある。今のところ真見がぐずる様子もない。

必要なものはだいたいそろえてあるのだが、デパートではどんな物が売っているのか、覗いてみたくて仕方がない。ほんの数か月前まで見向きもしなかった売り場が、今や、どの売り場よりも魅力的に思えるのだから不思議なものだ。

「お参りに便利なものがあるかもしれないし、ちょっとだけ、いいかしら？」

「まあ、ちょっとだけなら」

行くのは御子の育った神社なのだから、組のすぐ近所。何が必要ってわけでもないが、つついそん事を言いあつて、二人は子供用品売り場へと向かう。

ところが売り場のある階でエスカレーターを降りたところで、女性に声をかけられた。

「あら、御子さん。まあ、真美ちゃんも連れてくるのね」

黄色い声に顔を向けると、そこにいるのは由美だった。手にはデパートの紙袋を下げている。

「奥様もお買い物ですか？」

聞きながら二人は何だか由美の姿に違和感を持った。何かが物足りないような。

「ええ。この奥のペット用品売り場で、こてつにレインコートを買ってあげたの」

そうだ。こてつの姿がないのだ。いつの間にか由美のイメージは、こてつとセットになってしまっている。

「あの、今日、こてつ君はお留守番ですか？」思わず御子が聞いて見る。

「下の駐車場の車の中でね。だって、デパートはペットを連れて入

れないもの。残念だけど」

「ちゃんと我慢なさるんですね……」

そんな事当たり前なのだろうが、何だか由美にはデパートの中だろうと、こてつのリードを引いて歩きそうなイメージが、すっかり出来あがってしまったている。

「お二人は……。ああ、真美ちゃんのためのお買い物ね？　ここは子供用品売り場……」

ボン！

突然の巨大な爆発音と振動に、由美の声がかき消された。

香はやって来た客の中に、智の姿を見つけて真底驚いた。なんでこいつがこんなところに？

だが、それを顔に出すわけにもいかず、営業用の笑顔を取り繕いながら、接客をする。

「中野さん、この間は川向うの料亭にいらしたんですって？　ウチは振られちゃったのかと心配したんですよ。また、お顔を見せて下さってホツとしましたわ」

女将さんが客の一人に声をかける。先月、香がこっそりマイクをしかけに行った料亭に来ていた中野と言う男だ。

「よく、知ってるなあ。ちよつといつもとは違う仕事の話があつたんでね。勿論一番のひいきはここに決まっているよ。こんな美人の女将がいるんだからね」中野はそう、笑顔で言い返す。

「お上手言つて。あそこの女将とは昔からの知り合いなの。女将同士のつながりつて、固いものがあるんですよ。あっちのお店も使っていただけで嬉しいけど、ウチの事も忘れないでくださいね」そう、女将が釘を刺す。

「そうか。こつちでだらしくしていると、向ここの店に筒抜けだな。これは下手に酔えないぞ。アツシさん」

中野がアツシにそう、笑いかける。アツシは口には出さずに「ニッ」と会釈をする。その後ろに智が控えていた。

「あら、そんなことおっしゃらないで。ここは向こつのお店のように取りすましたりせずに、気楽にお酒を楽しんでいただきたいわ。今夜も季節のお料理を、中野さんのお好みに合わせてご用意したんですよ」

「ほう、それは楽しみだ。女将に乘せられて、酒が進みそうだな」

二人がそんなやり取りをしている間に、アツシは自分の名刺の裏

に何事かペンを走らせている。そしてそれを智に手渡すと、

「これを女将に渡してくれ」と、小声で囁いた。

そこで智は女将が下がったのを見届けると、少しだけ間を開け、自分も部屋を出て女将の後を追う。渡された名刺の裏には

「了解した。詳しくは中野さんに聞く」とだけ書かれている。

あの時の会話のやり取りは、女将は中野に言っていたのではなく、アツシに伝えていたのか。あの会話の感じでは、中野が他の店で誰かに会っていた事を教えていたのだろう。成程。こういう世界では電話やメールに頼らずに、必要な事はこうやって伝えあっているのか。結構めんどくさいものなんだな。智は妙に感心した。

女将の方でも後を付けられているのは分かっているらしい。軽く視線をこちらに向けて、奥の部屋の扉を開ける。智が後から入るとそこは従業員の休憩所らしいところで、そっけないイスとテーブル、お茶の道具と小さなテレビが置かれていた。女将は名刺の裏を一目見ると、

「それで結構です。こてつ組も承諾済みの事ですから。今夜二時頃、組長に電話を入れます。そう、アツシさんに伝えてね」そうにつこり笑って部屋を後にする。

すると、入れ替わるようにして香が部屋に入ってきた。どうやら接客は他の仲居と交代し、休憩に入っただけらしい。

「何であんたがこんなところにいんの？」香は早速尋ねて来た。

「アツシさんの手伝いさ。俺、華風組にいるんでね」居候だと言う事は伏せておく。みつともねえや。

「ふーん」香は興味なさげにテレビのスイッチを入れた。その態度が何だか腹ただしかった。

「人に聞いておいてその態度はなんだよ。俺、ここの客だぜ」

「客？ だったらなんでこんなところにいつまでもいるのよ。ここは従業員以外立ち入り禁止。それに私、今は休憩中だもん。あんたこそいつまでぐずぐずしてんの？ 仕事中でしょ？ 華風ってそん

なグズ、置いとくと思わないけど」

本当は組員にさえなれていない。それが引っ掛っただけにこの言い方が智は面白くない。つい、ムキになる。

「余計な御世話だ。お前こそちゃんとその傷、隠せるんじゃないか。ハルオの前で隠さないで店では取り繕うって、金ずるになるオヤジでも漁ってるのかよ」

「それこそ余計なお世話よ。こっちは客商売なの。仕事でなけりや、こんな傷隠す必要なんかないわよ。ハルオはあんたなんかと違うの。大体、華風に入ってもハルオの事に突っかかるなんて、あんたもいい根性してるわね」

「どういう事だよ。ハルオと華風と、なんか関係あるのか？」

香はこの言葉を聞いて疑わしそうな表情をする。こいつが本当に華風の組員なら、日が浅いとはいえ、ハルオが土間さんの子かもしれないと言っ噂を耳にしないなんて事があるんだろうか？

「あんた、本当に華風にいるの？」

不審な目で、そう問いかけられて智は少しひるむ。

「いるぜ。だからアツシさんのそばについてるんじゃないか」

嘘はついてない。置いてもらっているのは事実だ。だが、香の様子を見る限りこの話題を引っ張るのは何だかまずそうだ。要らぬ墓穴を掘りそうな気がする。

「それに一応、遠回りに褒めてんだぜ。傷が隠れりや、お前、ルツクス悪くないじゃん。ハルオなんかの相手はもったいないな」少し気取った声で、そう言ってやる。

「それはどうも」そう、そっけなく言いながら香は自分のお茶を入れている。智の方には見向きもしない。

智はカッとなった。このところのイライラしている上に、この間の様子じゃハルオが相当惚れ込んでいるらしい香が、こつも自分に関心のない態度をとると、無性に腹が立ってくる。

「おい！ こっち見ろよ！」そういいながら香の肩をつかもうとして、素早く香にかわされる。

智はそのまま前につんのめってしまった。くそ！ こいつはやたらとすばしっこいのを忘れてた！

「このアマ！」そう叫んで再び香に向かおうとした時、

「おい！ 何やってる！」戸口にアツシが現れた。

「なんでもないです。こいつが一人で暴れてただけ」香はツンとして言う。

「……女将さんがそれで結構、と。今夜二時に組長に電話を下さるそうです」智はアツシに腕をつかまれながらふくれっ面で伝言を言う。アツシはため息をついた。

「悪いね、香。俺のカバン持ちが馬鹿をやったようだ」アツシは智の腕をつかんだまま言った。

「カバン持ち？」香は智を見て、やや軽蔑的な笑いを見せる。しかしアツシは、

「ほら、ちゃんと頭を下げる」そう言うて智の頭に手をやって、押さえつける。智は抵抗も出来ずにいたが、急に香がテレビに目をやり、少し呆けた声を出す。

「なに、これ？ 駅前のデパートよね？」

二人もテレビに目をやると、よく見慣れた駅前のデパートがテレビに映し出されている。ただ、その様子が尋常ではない。デパートの建物の上階部分が、えぐられたように崩れていて、白煙をもうもうと上げているのだ。

三人があっけに取られてテレビに見入っていると、香の携帯が鳴った。

「か、香！ た、大変だ！ え、駅前の、デ、デパートが……」電話口からハルオのどもり声が聞こえる。

「うん、今テレビでやってる。何があったのかしら？」

「そ、そのデパートに、み、御子と良平が、い、いるはずなんだ！」ハルオが叫ぶ。

「御子さん達が？」香も思わず叫んだ。

「お、俺達、い、今デパートに、む、向かってるんだ。か、香は？」
「仕事中だけど、すぐ行く。女将さんに許可をもらっわ。そっちで待ってて！」

香が部屋を飛び出すのを、智とアツシは啞然と見送った。

突然の轟音が耳を襲う。そして激しい風に襲われる。御子は真見を強く抱きしめる。

しかし強い風に足元がすくわれる。一気に身体が持つて行かれて、真見をかばって体を折るような体制になる。すると背中から良平が支えてくれた。さらに、御子をかばうように由美が支える。

風と一緒にほこりが舞い上がる。強い風の中、三人は真見にほこりがかからないように覆いかぶさった。風の吹きつける方を見ると、何と、建物の一部が無くなり、夜空が口を開けている。そして、その上らガラガラと瓦礫が降ってきた。舞い上がるほこりは、砕けた瓦礫が発しているものだった。

気がつくと風は止み、夜空は瓦礫が覆い尽くしていた。と、同時にそこは真つ暗な空間になってしまった。

そんな中で突然、冷たい水が身体を襲う。雨か？ いや、ここは室内のはず。天井から夜空は見えていない。これはおそらくスプリンクラーの水だ。御子はさらに水から真見をかばう。

「御子さん。これ、こてつのレインコートなの。真見ちゃんにかけてあげて」

そう言つて由美が差し出したレインコートを、御子は手探りで受け取った。夢中で真見にかける。

すると真美は火がついたように泣きだした。驚きが恐怖に変わったのだらう。だが、元気な泣き声だ。御子は携帯を開いてわずかな明かりで真美の様子を確認する。大きな怪我はないようだ。ホッと胸をなでおろす。やがてスプリンクラーの水が止まると、舞っていたほこりもおさまっていた。

「御子、真見は無事か？ お前は？」携帯の薄明かりの中で、良平が聞いた。

「大丈夫。真見に怪我は無いわ。私も無事よ。良平と、奥様は？」

「私も大丈夫です。怪我はしてないわ」由美のしっかりした声の返事が返ってきた。

「俺も無事だ。これは、なにが起こったんだ？ 何か爆発音が聞こえたが」

「事故があつたのかも知れせんわ。ここには最上階にレストラン街があるから。でも、どうしましょう？」

由美が落ち着かなさげに聞く。不安そうな声だ。

「下手に動かない方がいい。こう、暗くては怪我をする。……御子？ どうした？」

御子が良平に急にしがみついたのだ。

「なんだか、すごく嫌な感情が流れてる。ぞっとするような、冷酷な……。真美が泣いてるのは、爆発に驚いただけじゃないわ。遠くにあるのに、強い感覚が襲ってくるって言うか……」

「あ、分かるわ。この、嫌な感じね？ 気味の悪い、嫌な予感めいた感じ」

由美にそう、即答されて、御子は驚く。そう言えば奥様は「私は勘が働く」って、以前も言っていたつけ。香が襲われた時にも、いち早く知らせてくれたのは奥様だった。

やがて御子の脳裏に声が聞こえて来る。

（うまくいった。これで救助に人が向かったら、もう一つ爆発させてやれ。一気に被害者が増えるぞ）

ぎよっとする。真美が一層激しく泣き出す。由美も自分の腕を抱え込んでいた。

「大変！ 携帯、繋がるかしら？」

御子は慌てて通話を確認める。通じている。急ぎ、会長の携帯番号につなぐ。

「もしもし？ 聞こえますか？ 御子です。今、デパートで奥様と

一緒なんです。でも、デパートが何者かに爆破されたんです」

「爆破？　今、テレビで爆発事故が起こったようだ……」会長の呆然とした声が聞こえる。

「事故じゃありません。誰かの意思で爆発させたんです。私には分かるんです。奥様も感じとってらっしゃいます。よく聞いて下さい。ここに救助に人を向かわせないで。犯人はそのタイミングを狙って、また、爆破するつもりです。どこかでこの状況を見て、次の爆破を狙っているんです。奥様も私達も無事です。どうか、会長の力で警察と、消防の動きを止めて下さい。私の能力を知らない人は、私の言葉を信じてはくれませんか」

「由美も、お前も、無事なんだな？」会長が確認するように聞く。
「無事です。良平もいます。今のところ大丈夫です」そう言って由美の方を見ると、

「主人なの？」と、由美が聞いた。頷いて携帯を由美に渡す。

「もしもし？ あなた？ 私は大丈夫よ。でも、ここに真見ちゃんもいるの。御子さんがこの間生んだ娘さんよ。御子さんの言う事を聞いた方がいいと、私も思うわ。嫌な予感がするのよ。あなたからもおまわりさん達にお願いして。みんな、狙われているんだって」
「分かった。やれるだけやってみよう。大丈夫だ。必ず助けは来る。待っていなさい」

「それから地下の駐車場の車に、こてつがいるはずなの。早く迎えに行つてあげて」

「大丈夫だ。お前も落ち着いて行動してくれ。御子に代われるか？」
由美が御子と電話が変わると、

「警察と消防は何かしよう。いいか？ まだ何が起こるか分からない。これから連絡はメールにしろ。充電をなるべく持たせないといけない。何かあったらメールしてくれ。分かったな」

そう言つて会長は通話を切った。暗い中ではあるが、御子は携帯を閉じた。

「良平の携帯は充電、どのくらい残つてる？」御子が聞いてきた。

「半分くらいだな。お前は？」

「私も今ので半分くらいになった。奥様、携帯は？」

「持ってます。今日はそんなに使つてないから、あんまり充電は減つていないと思うわ」

「良かった。それは心強いや」

良平がそうついた時、フロアに明かりが戻ってきた。非常灯がつ

いたようだ。

ざわざわと人の話し声が聞こえて来た。近くに結構人がいる。場所が場所だけに子供連れも多いようだ。

周りを見渡すと状況は厳しい事が分かった。

フロアの一方はエスカレーターごと完全に瓦礫で埋まっていた。

反対側はシャツターと防火扉が閉じられているのだが、どちらもおかしな形にひしゃげているのが分かる。多少の隙間はできているが、通り抜けるのは無理そうだ。おそらくあの扉を人の手で開けるのは不可能だろう。方角的にはあの向こう側に階段があったはずなのだが。

これは、ここにいる全員が閉じ込められたと見て、間違いなさそうだ。

「怪我人とお子様連れの方は、こちらにいらしてください！乾いた床と、毛布がありますから！」

男性店員らしき、よく通る声が聞こえた。さっそくそこに行ってみると、遊戯用のボールパークに使われていたコーナーからボールが出され、おそらく売りものであったのであろう、プレイマットが敷き詰められていた。女性店員たちが子供たちにバスタオルを渡して、身体を拭いてそこにはいるように勧めている。職業意識だろうか？　こんな時でも冷静なものだ。良平がそう店員に言っと、

「こういう時には体力のない子供が、一番大変ですから。守ってやらないと」

そう言って御子の腕の中の真見を見る。

「これは……。まだ小さいですね。そこにあるベビーカーで寝かしてあげた方がいいかな？」

「いえ、私が抱いていればこの子は大丈夫です。私も体力には自信がありますから。ご心配なく」

「分かりました。なら、こちらに腰掛けて下さい。でも、毛布はお渡ししておきましょう。幼児用ですが」

そう言ってベンチを勧め、全員にタオルと毛布を渡してくれる。

「これだけの爆発があつたんだ。大怪我をした人もいるんじゃないか？ 何か手伝えることは無いか？」

良平は店員にそう聞いたが、

「いえ、幸いそういう怪我をした方はいらっしやらないようです。

さつき電気がついた時に、フロアを従業員で一通り確認したんです。瓦礫の向こうの吹き飛んだ部分はどうなっているか分かりませんが」

この感じでは、瓦礫の向こうがフロアの三分の一ほどを占めていたはず。爆発の瞬間、そこは夜空しか見えなかった。あのあたりにいた人はどうなったのかは……。今は考えない事にしておこう。

「大丈夫、今に救助が来ます。何かあったらおっしゃってください。隣の喫茶コーナーのポットにお湯もありますし、おむつやおしりふきもあります。少しの辛抱です。落ち着いて待ちましょう」

そう言って店員は次の親子の元に、毛布を配りに行った。

その救助の手が、畏にかけられているとはとても言えない。こんな時にパニックも起こすことなく、皆冷静でいられるのは、こういう氣遣いをしてくれる人達がいるからだろう。

この人達のためにも、何としてでも犯人の爆破を止めなければ。

「良平、私、犯人の思念をもっと探ってみる」御子が言った。

「そんな事が出来るのか？」

「分からない。その場にいない、全く知らない人の思念を追ってみた事なんてないから。でも、これほど強い思念はめったにあるものじゃないわ。それに、真見や奥様もいるせいか、力が共鳴していつも以上に感覚が鋭くなっている気がするの。きっと相手の考えを読めると思う。そうすれば爆発物のある場所や、犯人の考えが分かるかもしれない。やれるだけ、やってみる。奥様、私のそばで、自分が感じた気持ちを私に伝えるつもりになって頂けますか？ 思ったまんまでいいですから」

「え？ ええ。それで何かのお役に立つなら」

由美は訳が分からないなりに、御子のする事に今、自分達は賭けるしかないのだと感じ取ったようだ。御子は奥様が感覚的な人で助かった、と思う。

「ありがとうございます」

「御子、俺は何をすればいい？」と、良平が聞いたが
「そばにいてほしい。それで十分」そう、御子は笑った。

香が爆発のあったデパートの前に着いた時には、すでにハルオと
真柴組長、それに会長と礼似、一樹に大谷の姿もあった。

「私も会長に話を聞いたところなの。中に御子と真見と良平。それ
に会長の奥様まで閉じ込められたらしいわ」礼似が香に説明した。

「奥様まで……。一体何があったんです？ 事故？」

「違うみたい。実は……」礼似は会長から聞いた、御子との電話の
やり取りを香に話す。

「それじゃ、救助に人が入ったら、かえってみんな危ないじゃない
ですか！ 警察や消防の動きを、どうやって止められるんですか？」
香は礼似に喰ってかかったが、

「それはとりあえず大丈夫だ」と、会長が言う。

「会長が抑えられたんですか？ どうやって消防まで……」

いくら警察にコネのある会長でも、消防の救助まで抑え込めるも
のなのだろうか？

しかしそれには一樹が返事をする。

「そんなのちよつと知恵を回せばいい事さ。さっき俺が警察に公衆
電話で犯行声明した。デパートの中にはまだ爆弾が仕掛けてある。

救助の気配があれば、すぐ、次の爆破をする。おとなしく次の指示
を待て。そう言っただけだ」

無茶な事するな！。そうは思うが、確かにそれしか手は無いかも。

「その電話には真実味があるような事を、私も警察へのコネを使っ
て流してある。これでしばらくはもつだろう」会長もそう、請け負
った。

「今は御子からの連絡を待っているの。どうやら犯人の心が読めて
いるらしいのよ。きつと何か言ってくるわ。そうしたら私達の手で
爆弾を何とかしないと。警察じゃ、御子の力は信じてもらえないだ

ろっしね
「

礼似は齒がみをしながらそう言った。

「悪いが誰か地下の駐車場に行ってくれ。止めてある車の中に、こつがいているらしい。迎えに行つてやらないと。これほどマスコミが押しかける中、私がうるうるする訳にも行くまい」

会長が苦々しげに言った。確かに周囲はテレビカメラや、取材をしている人間たちでいっぱいだ。

「そうですね。私、行つてきます」そう、礼似は言つたが、

「ちよつと待て、お前も組長だろうが。お前もうるつくんじやないと、一樹に止められる。

「私、行きます。車のキー、貸して下さい」すかさず香が言つた。

「香が行つてくれるなら、ハルオ、一緒に行つてそのまま建物の中に潜り込んでいてくれないか？ 御子さんから連絡があつた時、中に人がいた方が次の動きがとりやすいかもしれない。ハルオはこういう事が得意だし」一樹が考えながらそう言つと、ハルオもすんなり了承した。

「ハルオだけじゃ心配だわ。潜り込むんなら私も一緒に」礼似はそう言つたが、

「それはダメだと言つてゐるだろう。一樹の言つとおりだ。礼似に下手に動かれては困る。俺の舎弟の若いのを行かせよう」大谷もそう言つて礼似を止める。

「だつて、中に御子達が閉じ込められているのに！」

礼似が大谷に喰つてかかろうとしたその時、アツシと智に連れられて、土間が顔を出した。

「礼似、あんたは引つ込みなさい。もう、こういう時に前に出ていい立場じゃないでしょ？ ハルオには智を付けるわ。智、ハルオを手伝つて」土間はそう言つて智に命じる。

「何で俺が！」智は怒鳴るが、

「あんだ、組に入りたいんでしょう？　こういう時に組長の言う事聞けないで、組員になれると思う？」

そう言われると智は反論できない。

「土間さん、コイツじゃ駄目よ。コイツ、ハルオを目の敵にしてるんだから。ハルオの手伝いなら私がするわ。あんたはこてつを連れ帰ってくればいいから」

香はそう言ったが、今度はハルオが黙っていなかった。

「か、香。だ、駄目だ！　な、中はどうなってるか分からないし、い、いつ、爆発するかも分からない。ぜ、絶対、駄目！」

「危ないのはハルオも一緒でしょ。コイツじゃ信用できないもの」
香は智をぎろりとにらみつける。

「智、あんだ、奥様達を助けられなかったら、組をすぐに出てもらうわよ。華風はこてつ組の傘下なんだから。どうする？　ハルオを手伝う？　それとも出ていく？」

「……行きます」智はぶすつとしたまま答えた。

「香、智は大丈夫よ。自分の立場を分かってる。ここはハルオと智に任せましよう。礼似、あんたもいいわね？」

土間にここまで言われると、誰も反論できなかった。

「じゃ、三人とも頼んだわよ」そう言って土間は三人を送り出す。
香が一番不満そうな顔をしていた。

爆発があつたその時、こてつは由美が帰って来るのを待って、いつもの助手席に伏せて待っていた。

時折人の歩く音や、エンジンのかかる音が駐車場に響いたが、こてつが由美の足音を間違えることは無い。いつもの由美の、こてつを心配して速足になって歩いてくる足音が聞こえるのを、こてつは今か今かと待ちわびていた。身体は伏せているものの、全神経は耳に集中し、由美の足音を聞きもらすまいとしていたのだ。

すると突然、今まで耳にした事のない、大きな音が襲いかかった。異常な音と、異様な雰囲気。人の叫び声や、エンジンのかかる音。車の走行音。あたりはいつぺんに騒がしくなった。

それでもしばらくすると、その場は急に静まり返る。人の気配が無くなってしまった。こてつは不安に襲われたようだ。

こてつが息苦しくないようにと、由美がわずかに開けていった窓から、うつすらときな臭いにおいが漂う。こてつはその窓に向かって爪を立てる。

ワンワンと大きな声で鳴いて見るが、人が近くに来るようすは無い。今度はピスピスと甲高い悲しげな声を上げる。しかし誰かが車のドアを開きに来る気配は無かった。

思い切って窓に体当たりしてみる。窓はびくともしない。今度は運転席の端ギリギリまで下がり、勢いを付けて窓の隙間目がけてぶつかって行く。

バン！ と、跳ね返されてしまうが、その瞬間に、わずかに「ミシッ」と、音がした。

こてつはかまわず体当たりを繰り返した。身体は跳ね返されるが、その都度窓に軋むような音が走る。そしてついに、

ガシャーン！

大きな音と共にガラスが砕け散り、こてつは車の外に飛び出した。そして床にわずかに残った由美の匂いをたどり、こてつは建物の中へと姿を消して行った。

御子は必死に集中していた。犯人の感情ははつきりと漂ってきていた。それを追うのは簡単だ。ただ、まとまった考えを読み解くのはやすやすとはいかない。犯人の次の行動を探るべく、御子はその感情のありようから、犯人の心の声を聞き取るうとしていた。

（おいおい、ビルの崩れたところばかり映すなよ。もっと面白いところがあるだろう？ 出入り口とか、非常口のあたりとか。救助隊の動きを見せてくれよ。おんなじ映像しか映さないなら、わざわざ

へり飛ばしてる意味、ないじゃないか)

そんな声と、嘲笑うようなイメージが感じ取れる。

「犯人、近くにいる訳じゃないわ。テレビの映像で救助の動きを確認しようとしているみたい」

御子が目をきつくつむりながら言う。

「テレビか。高みの見物とは嫌な奴だな。これだけの事件になれば、カメラもかなり回っているんだろう。厄介だな。奥様、携帯にワンセグ、付いていませんか？」

「そうだわ。付いてた。あんまり使う事、ないんだけど」

そう言っで由美は携帯をワンセグ画面に切り替える。電池を食うのは惜しいが、犯人の視点を知りたい。

すると御子の携帯が鳴った。メールの着信だ。良平が開いて見る。

救助隊の動きは止めた。ハルオと華風の若い奴を、地下の駐車場から潜り込ませる。

メールにはそれだけ書かれていた。地下駐車場か。そこにカメラが回っていなければいいが。各局を回して、画面を確かめる。

「地下の映像は無いようだな。これならハルオ達の事は気づかれてはいないだろう」良平はホツとした。

そして御子の携帯で、犯人はテレビ画面で状況確認をしている事を返信する。これで会長達もカメラの動きには慎重になってくれるだろう。

そのうち、御子の頭にさらに声が聞こえて来た。

(中にいる客の様子も分かれば面白いのに。まあいいか。仕掛けもあるし)

仕掛け？ 一体なんだろう？ 一層深く集中する。犯人の過去の

記憶がかすかに見える。わずかな火薬、電線にスイッチ。大量の細かな釘や、鋸……。

（爆発力は知れてても、これだけの釘が刺されば、致命傷にはなる。誰かがうまく持ちあげると面白いな）

そんな声も聞こえて来る。

「大きな爆弾だけじゃないわ。誰かが不用意に触ったら、釘や鋸が大量に人に刺さる仕掛けもあちこちにしてある。致命傷になるって」
御子は啞然としながらそう言った。

「おい、このフロアにも仕掛けがあるのか？」良平が慌てて聞いた。こんな閉じ込められたところでそんな仕掛けが爆発したら、ひどい事になる。

「待って、ここは子供用品売り場……」御子が懸命に探る。このフロアの様子と同じイメージが仕掛けた場所にないか丹念に探っていく。

「ありそうだわ。おもちゃ売り場みたいなところの大きな柱の下、紙袋が置いてある。これに触っちゃだめだわ」

おもちゃ売り場と言ったって、こんな不慣れな場所では、何処に売り場があつて、柱があるのか分からない。

「店員に協力してもらおう」

良平は、さつき皆に呼び掛けていた男性店員の姿を見つけると、この爆発は事故ではなく、何者かが仕掛けた爆弾らしいと告げる。そして、他にも仕掛けがあると。店員は青くなった。

「そんな。こんなに子供も多いのに。不用意に触られたらおしまいだ」

店員は他の従業員達を呼び集め、フロアにいる人たちに呼び掛けるように伝えた。

「不審物には触らないでください！ 危険物が爆発する恐れがあります！ 不審物に触らないで！」

そんな声があちこちに響くと、皆、ざわざわと騒ぎ始めた。

「爆発って、どういう事だ！」

「これって、事故じゃなかったの？」

口々にそんな言葉がのぼる。中には従業員に詰め寄るものもいる。彼らだって何も知らないと言うのに。フロアは騒然となった。その時、

「ありました！ 不審物らしき紙袋が！ あ、柱の陰です！」そ

う、従業員の一人が叫んだ。

皆の声がピタリとやむ。息を飲んで柱の方を見ると、確かにそこには不自然な紙袋があった。

「皆さん、下がって」そう言うと、誰もが紙袋から大きく離れた。良平は手近な商品看板を手に取り、それを盾にして、陳列棚の支えにされていた長い棒を抜き取り、そっと、紙袋を倒した。

バン！と、軽い破裂音がしたと同時に、大量の釘と鋸が勢いよく飛び出した。良平が盾にした看板にも突き刺さっている。直接手にしていたら、すべてが身体に突き刺さっていたはずだ。誰もが黙り込んで散らばった釘を見つめていた。

すると、さっきの男性店員が駆け寄ってくる。

「お、お客様！ 足に！」良平のズボンのふくらはぎのあたりに、釘が数本、刺さっていたのだ。

「ああ、大丈夫です。ご心配なく。これは義足なんです」そう言って釘を抜き取り、にっこり笑う。

「そうでしたか。良かった、他のところに刺さらなくて。運が良かった」ホッとした声で言ってくれる。

本当はとつさに義足で身をかばったのだが、それを言つとややこしい話になりかねないので、良平は「ありがとうございます。ご心配おかけしました」とだけ言っておいた。

しかし、他の人たちはそれどころではないらしく、他に不審物は無いが、子供は無事かとわざわざと騒ぎ始める。そのうち誰かが、大声を上げた。

「おい！ テレビを見る。救助がこれなくなってる！」

声は喫茶コーナーから上がっていた。そこにはテレビがあり、このデパートの崩れた姿が映るその上に、字幕のテロップが流れていた。そこには、

犯人による犯行声明があった模様。救助の撤退を要求し、受け入

れなければさらなる犯行を示唆。

そう書かれた文字が、速報として流されていた。

「冗談じゃない。救助がこないなんて。子供もいるってのに」

「まだ爆発があるって言うの？」

皆、すっかり浮足立ってしまい、殆んどパニック寸前の様相だ。こういう時に一番怖いのはパニックから冷静さを失う事。群集心理が働いて、どんな事態が起こるとも分からない。しかしここで落ち付けと言うのはかなり難しい。騒いだからと言ってどうなるものでもないのだが。

しかしまずいな。周りがこんな状態では、御子の集中力にも影響があるだろう。御子は大丈夫だろうか？ 良平は御子達のいた場所へと戻って行く。すると突然、場違いな声がフロア中に響いた。

「ワン！」

その、甲高い鳴き声に誰もが耳を疑い、そして鳴き声の聞こえた方向に視線を向けた。

「ワンちゃんだー」子供の一人が嬉しそうに声を上げる。何人かの子はその方向に駆け寄って行く。

「こ、こてつ？ なんで……」由美でさえ、呆然としていた。

こてつも由美の姿を見つけたらしく、あの、ひしゃげた防火扉の隙間から懸命に中に入ろうとする。子供達もこてつの顔や前足を遠慮なく（！）引つ張り、こてつを中に入れようとしていた。

決してスリムとは言い難い体型のこてつだが、子供たちに引つ張られて、無事フロアの中に入ると、嬉しそうに由美の元に駆けつけた。大勢の子供達もその後を追って行く。

こてつは啞然とする由美の前に、こてつらしくペツタリと座り、いかにも頭をなでくれ言わんばかりの笑顔を向けた。すると由美より先に子供たちが次々とこてつに抱きついてくる。

「かわいいー」

「ふわふわしてる」

「あったかいねー」

子供たちは片っ端からこてつをなでまわしている。

「こてつ。あの車の中から出てきちゃったの？」

由美は思わずこてつに聞いたが、勿論こてつに返事が出来る訳もなく、

「このワンちゃん、こてつって言うの？」

「こてつ、お座りー」

「ねえ、こてつ。お手してよ、お手」

と、子供たちの方がはしゃいでいた。

「ね、こてつはおばちゃんに会いに来たの？」由美のすぐ隣にいた子が、そう聞いた。

由美はあらためてこてつの顔を見る。いつもと同じ、屈託のない（いささかなさすぎる）笑顔だ。

「ええ、ええそうね。偉いわね。ありがとう。こてつ……」由美はこてつを思い切り抱きしめた。

こてつは一層の笑顔になって、嬉しそうな表情をする。すると子供達は「可愛い、可愛い」とはしゃぎ出す。さっきまでのピリピリとした空気が、こてつの登場でかなり和やかになっていた。何よりも子供たちの表情が違う。大人たちの緊張から来る、激しい不安が、目の前の愛くるしい生き物によって、大きく和らいだのが分かる。「犬でさえ入ってこられたんです。警察や救助隊だってバカじゃない。きっと、犯人の隙を突くなり、捕まえるなりして、救助に来てくれるはずです。子供たちだって、こんなに元気じゃないですか。大人がうるたえてどうするんです。私達も信じて待ちましょう」

男性店員がそう言うのと、もう、誰も苦情を言うものはいなかった。パニックは起こらずに済んだのだ。

御子と良平はホッとして顔を合わせた。また、同じような事が起こらない内に、早く犯人の裏をかい、爆発を阻止しなければ。

ハルオ、香、智が地下の駐車場に着くと、三人とも由美の車を呆然と眺めてしまっていた。

それもそのはずで、車の窓ガラスは粉々に砕け散っていて、そこにいるはずのこてつの姿は消えてしまっていたのだから。

「と、とりあえず、こ、この辺を、さ、探してみよう」

三人は手分けして駐車場の中を捜したが、こてつの姿は無い。もう、この辺にはいないようだ。

途方に暮れている所にハルオの携帯が鳴った。

「ハルオ？　今、御子からメールがあつたの。こてつ、車を抜け出して奥様のところに駆け寄つたらしいわ。今、一緒にいるって」

「ど、どおりで……。い、今まで、ちゅ、駐車場の中を、さ、捜し回ってたんです。と、とにかく、ぶ、無事でよかった」

「まあ、さすがはあの、こてつってところね。とりあえず香は引き返していいわ。あんたと智には頼みがあるの」

「な、なんです？」

「まだ建物の中に小さな爆弾もどきの仕掛けと、本命の爆弾があるの。御子が犯人の心を探って、場所を探してる。あんた達にその仕掛けと爆弾を探して欲しいのよ。仕掛けと言っても人に致命傷を負わせる力はあるらしいし、警察や救助隊が派手な動きは出来ない。」

でも、御子達がいるフロア以外にも人が取り残されているかもしれないでしょ？　うっかり触りでもしたら大変なの。爆発物や本命の爆弾を取り除いてさえしまえば、安全に救助もできるしね」

「な、成程。そ、その、爆発物を、な、何とかすれば、い、いいんですね？」

「そう、最初の爆発で、中の仕掛けもどうなってるか分からないから、十分気を付けるのよ。ホントは私も行きたいくらいなんだから」
「気、気をつけます。じゃ、じゃあ、香さんは帰って……」

そういいかけたハルオから、香は携帯をひったくった。

「礼似さん。私、戻りません。ハルオ達と一緒に爆発物を探します。いいですね？」

「ダメよ、いいわけないじゃない。あんたは帰ってきなさい。香！香？」

すでに通話は切れている。香はどうあっても戻るつもりがないらしい。

「冗談じゃないわ。私、行つて来る」そう言つて歩きかける礼似を土間が押しとどめる。

「わがままもいい加減にしなさい。あんた、組長の立場をなんだと思つてんの？」

「なによ！　こんな、お飾りの組長なんて！」

礼似はそう叫んだとたん、突然身体が吹っ飛ばされた。思い切り尻もちをついてしまう。頬に痛みが走り、会長が目の前で仁王立ちしていた。ようやく会長に殴られたのだと気がつく。

「お前は組長だ」そう、一言だけ告げて会長は自分の車に乗り、去ってしまった。

礼似はポカンとして、その場に尻をついたままでいたが、

「おい、俺達も戻るぞ」

そう、一樹に言われて引つ張られていく。無理やり車に連れて来られ、後部座席に押し込められた。「ちょっと！　誰がここから離れるって言つた？」

そう言つて降りようとしても、右には大谷が座り、左には土間がいる。礼似は座席の真ん中でふくれっ面をするしかない。

「何で戻んなきゃいけないのよ」

「こんなマスコミがウヨウヨいる所にいつまでもいられるか。ここにいたつて無駄だ。あの三人に任せるしかないだろう。へたすりゃ俺達は邪魔になるだけだ」

そう言って一樹は車を組へと走らせた。

一方、ハルオは香に文句を言っていた。

「な、何やってるんだ。れ、礼似さんの言う事、む、無視して」

「あんだとコイツの二人だけで行かせるなんて出来ないわ。私、こいつを信用してないもの」

そう言って香は智に指をさした。

「こつちだつて信用しろなんて頼んでねえよ。組長の命令でなけりや、誰がコイツの手伝いなんかするもんか」智の方も不満顔だ。

「とにかく、こてつもないんだし、あんだ達を二人で行かせてじつと待つてるなんて出来ないわ。私がこいつを見張るわよ。ハルオは爆発物を探すのに集中して」

「何でお前に見張られなきゃならないんだよ！」智は香に文句を言つたが、香は無視した。

「こいつの心配はいらないわ。私も十分、気を付ける」

ハルオはため息交じりに頷いた。

「ど、土間さんが信用しているんだ。だ、大丈夫さ。と、とにかく中に入ろう。ま、周りの物に、う、うかつに触らないように」

御子はひたすら犯人の心を探る。爆弾のありかを一番知りたいが、犯人の今の関心事は救助隊の動きと、他の爆発物が、うまく爆発したかどうかに向いていたようだ。

ところがテレビの速報で、自分の知らない犯行声明が行われた事を知り、ムツとしたようだ。

（なんだよ。人のゲームで勝手に遊んでいやがる奴がいるのか。人を利用しやがって）

だが、動揺する様子はなさそうだ。

（まあ、仕方がない。派手な事をやってやった証明だ。まさか中の人間を見殺しにするような真似は出来ないはずだし。どれ、俺もそろそろ動くか）

「犯人、動きだしたわ。デパートの中に入るみたい」御子が言う。
「中に？ この騒ぎの中、どうやって人目に触れずに？」良平はそう言ったが、

（子供でも探していたらしいあいつらも、そのうち中に入るだろう。仕掛けを試すにはいい実験材料だ）

と、犯人のほくそ笑む様子が浮かぶ。

「やだ！ 犯人も地下の駐車場にいるんだわ！ ハルオ達の事がバレてる。車から降りて、建物に入ったみたい」御子が慌てる。

「ハルオ達が鉢合わせするかもしれないのか？ いま、犯人がどのあたりにいるか分かるか？」

「ダメだわ。何か、憎悪の念が強すぎて、周りが見えてない。まるで霧の中を歩いているみたい」

御子が首を振りながら言った。

「くそつ。とりあえずハルオに知らせよう」良平はハルオの携帯にメールを送る。

「は、犯人。さ、さつきまで、お、同じ駐車場にいたらしい。こ、この辺に、ひ、人の気配は無いか？」

良平からのメールを見たハルオにそう言われて、香も智も周りを見回すが、近くに人のいる気配は無い。

「地下からの入り口、いくつかあるから、こことは別のどこから入ったんだろう。うまく見つけてとっ捕まえられれば早い」智はそう言ったが、

「でも、鉢合わせでもしたら、逆切れして何しでかすか分からないわ。うかつに刺激、出来ないわよ。平気で建物爆発させるような奴なんだから」と、香は神経をとがらせながら言った。

思っていたより香は冷静だ。突っ込む一方だった時の姿はもうない。ハルオも少し、ホツとする。すると再び携帯が鳴った。メールの着信だ。

犯人、爆発物を仕掛けながら歩いている。狙いはお前たちだ。下手な物を踏むな。十分気を付ける

「も、物を振んじや駄目だ。し、仕掛けが増えているらしい」

ハルオが言う。二人はぎよつとして足元を見つめる。

ここは地下の食品売り場。所々に火を使うための調理スペースも見える。ウィンドウ越しに調理をしながら、出来たてを販売するテナントも結構入っているのだ。場合によっては危険物に引火するかもしれない。

「ゆっくり動くしかないな……」三人は足元を確かめながら、爆発物を探し始める。すると、

「ね、これ、怪しくない？」香が床に不自然に這う紐を指差した。十分に怪しい。全員の視線が紐の先に向かう。小さな段ボール箱が置いてある。

幸い周りに危険物はなさそうだ。ガスの臭いなどもない。あの爆発で、安全装置が働いたのかもしれない。それでも周りの可燃物を取り除く。そして、

「た、棚の影に、か、隠れて」ハルオがそう言っ、床に散乱している商品を手に取ると、段ボールの小箱に向かって投げつけた。

バン！ と軽い破裂音と共に、四方に釘が飛び散った。良平からのメール通りだ。

「結構飛ぶんだな」そういいながら智が箱の方へと足を延ばす。

「バカ！ 油断して！」香がそう叫んで智の腕をつかみ、自分の方へと引きもどす。すると、

パン！ と、さらに軽い音と共にもう一度釘が飛び出してきた。

間一髪、智の目の前を釘が飛んだ。

「適当に火薬を詰めた代物よ。どんな破裂をするか分からないじゃない。足引っ張るような真似するんじゃないわよ！」香は智にかみかかったままそう言ったが、智はそれにカッとなった。

「さっきつから俺に突つかかってんじゃねえよ」

そういいながら香の利き手をつかみ、首を腕で抱え込んでがっちり押さえつけてしまう。

それを見てハル才が智に向かおうとすると、智は手にナイフを握り、香の顔に近づけた。ハル才の動きが思わず止まる。

「ぐだぐだ小言言つてると、この傷跡、もつと深くしてやるぞ」ドスの効いた声で香を脅す。

だが、ハル才は素早い。智が香を脅すのに気を取られるうちに、ハル才は智のナイフを持つ手をねじあげた。智から逃れた香は、以前の恐怖を思い出したのか、青い顔で座り込んでいた。

ハル才は怒り心頭で、「香！」と叫んで、手のひらを伸ばす。

香はハル才のドスを預かっている。だからその手の意味を察しはしたが、しまつてある懷あたりに手をあてたまま、首を横に振つた。ハル才は歯ぎしりをして、力任せに智のナイフを奪い取り、智を突き飛ばした。

智は床に転がされた。起き上がったものの、ふてくされた顔でその場に座り込んでいる。ハル才は香に寄り添って「だ、大丈夫？」と聞いた。

「うん」

香はそう返事をしたが、どう見たって大丈夫な訳がない。落ち着かせてやりたいと思いいながらも、ハル才自身も智への怒りが先立つてしまい、うまく言葉が出なかった。

それでも黙つて香の背中をなでていると、香の顔色も少しは良くなってきた。

「か、香。ほ、他の仕掛けを探してくれ。お、俺、コイツに話がある」

一人にするのは心配だが、今は智の近くにいさせたくなかった。

「でも……」

「お、俺達なら、だ、大丈夫、だから」

そう言われた香も大丈夫とは思えない。でも、ハルオの言い方には、珍しく、有無を言わさぬものがあつた。私がついてきたのは間違ひだったんだろうか？　そう思いながら仕方なく香はその場を離れた。

「な、何であんな真似をする」ハル才は智に問いたです。

「あの女、あんまりうるさすぎるからだ。本気じゃねえよ。脅しただけだ」智はむつつりと答えた。

「あ、当たり前だ。本気だったら、お、お前、ただじゃおかない」

「そのナイフで俺を刺すか？ いいぜ。そいつは親父のナイフだ。それで殺されるんなら本望だね」

智はニヤニヤしながらそう言う。

「お、俺は自分のドスしか握らない。そ、それも、香に預けてある。で、でも、さつき香はドスを渡さなかった。俺がお前を傷つけるのを嫌がったんだ」

智はあつけにとられた。

「預けてる？ バカか？ あんた？ 自分の身を守る物を人に預けてんのか。あいつもまるで刀持ちの小姓だな」

「お、俺のドスは、み、身を守るための物じゃない。か、香を守るための物だ。その香が、お前を心配したんだ」

「俺を？ まさか？」智は小馬鹿にしたように笑う。

「お、お前、分かってないんだ。か、香はお前の動きも判断力も、あ、甘い事に気がついてる。し、信用できないって言ったのはそう言う事だ。さ、さつきもお前が飛び出すのに気付いて止めただろう？ お、お前を心配して様子をうかがっていたからだ。お、俺より、お前を心配したんだよ。こ、この場で多分、一番不慣れなお前を」

「そんなの……余計な御世話だ」

「ま、まったくだ。でも、か、香はそう言う娘なんだ。お、俺が誰かを傷つけるのを嫌う。か、香を守るよりも、じ、自分が守ろうとした子供を俺に守らせようとした事もある。き、気は強くて、そういう優しい娘なんだよ。そ、そういう娘にあんな真似するもんじやない。か、香は刃物使いが本当に嫌いなんだ」

「あんな傷もつてりゃ、そうだろうな」

智がそう言った途端、ハルオが真っ赤な顔で智につかみかかった。我慢も限界だ。

「それだけじゃない！ お前に何が分かる！ それに、あの傷は、俺のせいで付けられた傷なんだ。俺が刃物を持ったばかりに。それでも俺を信頼してくれてるんだ。俺はあの傷を見る度に、切なくて……いとおしくなるんだ」

ハルオがこぶしを握り締める。智は殴られると思ったが、

「……やめた。香が悲しむ」

そう言って智を離れた。

「それに土間さんがお前を信用しようとしてる。お前を華風に置いてるのは、土間さんか？」

「そうさ。……稽古の一つも、つけちゃくれないが」

「でも、お前を置いているんだよ……」ハルオの目が暗くなった。「おい、あんたは組長のなんなんだ？ みんなお前の事を意識しているようだが」智は聞いてきた。

「土間さんは俺に刃物を持たせてくれた人だ」

そして、いずれコイツにも稽古をつけるつもりだろう。そうでなければ刃物を持ちたがるコイツを組においては置かないだろうから。あの人の稽古は特別だった。俺が実の息子だから命懸けで稽古を付けてくれたんだと、心のどこかで思っていた。だが……。

「あんた、どもらずに話せるじゃないか」智がようやく気がついた。「頭にきているからだよ。お前は馬鹿すぎるし、土間さんはお人好しだ」

それに、香は優し過ぎる。ハルオはそんな言葉をのみこんだ。

「潜り込んだ事が、犯人にバレた？」

御子からの連絡を受け、礼似が叫んだ。こてつ組の組長室で、土間、一樹、大谷と共に、テレビの画面を睨みながら、携帯が鳴るのを待ち続けた挙句、犯人はハルオ達と同じ駐車場にいて、ハルオ達を新たな標的にした事を御子から知らされたのだ。

「もうダメ、我慢できない。どうしても私行くわよ。あんた達が止めたって無駄。あの三人に何かあったら、私の責任だわ」

そう言って礼似は部屋を出ようとしたが、一樹が声をかけた。

「行ってどうする？」

「どうするもこうするも、三人を犯人から助けるのよ。決まってるじゃない」

「助ける？ どうやって？ 相手は爆弾魔だ。銃やナイフで襲おうってわけじゃない。キレれば建物ごと人を吹っ飛ばすのを、楽しんでるような奴だ。しかもそれをテレビで眺めてるんだ。お前がマスコミに捕まれば、かえって犯人を刺激しかねない」

「私、そんなヘマしないわよ」

「あれだけのマスコミの目とカメラの数で、か？ それにうまく潜り込んだとしたって、犯人がどこにいるのか分からない以上、あっちにすれば標的が増えるだけだろう。それがこてつ組の組長だと知れたら、こんな派手な事をする奴だ。さぞかし虚栄心を刺激されることだろうな」

ここまで言われると、礼似も言葉がなかった。

「今のお前じゃハルオの足手まといだ。それとも、会長に殴られただけじゃ足りないか？ 俺や土間さんにも殴られた方が頭が冷えるか？」

礼似は部屋の戸口から引き返した。自分の席に乱暴なしぐさで座る。

「ちょっと席をはずしてもらえないか？」

一樹が土間と大谷に言った。二人とも顔を見合わせたが、黙って部屋を出ていく。

「こんな時に慰めてもらいたくなんかないんだけど」礼似は一樹を睨んだ。

「俺がそんな真似すると思うか？ 残念ながら逆だね。大谷は立場上、土間さんは心情的に言えないだろうから俺が言わせてもらうぞ。礼似。お前はドレミの三人の中で、一番胆が据わってない。組長の資質としては致命的だろう」

「悪かったわね。でも、私だってなりたくなつた訳じゃないわ」

「子供みたいな事を言うな。会長はお前が必要だからお前を選んだ。お前がこの組で生きる覚悟があるんなら、必要とされた事はやり抜くしかないだろう。なのに、お前は胆の据わりが足りない」

「そうよ。つまらない意地と度胸しかないのが私よ」

「開き直るな。何がお飾りの組長だ。俺が会長でもぶん殴ってる。お前が何故、無謀だったのか教えてやろうか？ 本当の度胸がないからだ。真正面から問題に立ち向かうための、自分の度胸に自信がない。だから常に、度胸試しをせずにはいらなくなる。お前もそこに気付いたはずだ。……香を通して」

「そうね。香は私にいろんな事を教えてくれるわ」

「だったら、ちょっとは胆を据えろ。お前がどんなに胆が足りなかるうが、俺達はお前に命預ける他にないんだ。そこから逃げるな」

逃げるなど言われて礼似は気づく。自分が守るべきものが突然一気に増え、及び腰になっている事に。全く気付かなかったわけでもないが、認めたくなかったんだろう。

「……分かつては、いるんだけどね。私、ここでしか生きられないし」

「そうさ、だから俺達は一度別れたんだ。それが互いのためになるって、あの時信じたはずだ。忘れたとは言わせない」

二人が別れた時、それは礼似が自分で一樹に足を洗わせた時だった。あの時は一樹の足を洗わせるのが一樹のためだけでなく、自分のためにも必要だと思っていたし、実際、だからこそ自分はこんな世界でも自暴自棄にならずに生き抜いたと思っている。

あの時、初めて心から自分はこの世界で生きる覚悟ができた。どんな事があっても、この世界で起こるすべてを乗り越えようと言う覚悟をもっていた。

ただ、それは自分が一人で生きるための覚悟でもあったのかもしれない。

でも、今の自分はひとりじゃない。心を開く相手がいつの間にか増えてしまっている。自分一人ではコトが済まない、責任も背負ってしまった。

その中で逃げずに覚悟を持ち続ける。頭では分かっている。香にさえ言い聞かせて来た。

それでも自分が心を寄せる人間に危機が迫ってしまうと、それを守るのがこんなにも難しかったのかと、思い知らされてしまう。

「忘れちゃいないわ。でも、御子や香まで巻き込まれると、つい」
弱気な台詞が出てしまう。それを一樹に言わされているのも、悔しい。

「それを言うなら会長は、自分の妻が巻き込まれてる。土間さんだってハルオや御子さんの心配をしないはずがない。動揺しているのはみんな同じだ。それでも、ハルオ達を信じているんだ。香だって自分で判断した事だ。黙って見守ってやれ」

そんなこと分かっている。分かっているつもりになってしまう。だからこそ一樹もあらためて言っているのだろう。

香だって、もう、一人走りの無茶はしない。分かっているのに。「見守れば、少しは組長らしくなれるかしら？」礼似はそう聞いたが、

「大分、それらしくなれると思うぜ」

と、一樹は請け負った。

「やっぱり私、組長に向いてない」礼似はそう言って首を振った。

「何で会長はお前を選んだと思う？」一樹が質問した。

「派閥のバランス。そのためでしょ？」

「それだけじゃないさ。お前の情の濃さ。そいつは結構大事な事なんじゃないのか？ こんな時に冷静でいられなくなるその情が、かえってお前に信頼を寄せさせる。しかも冷静さを失いさえしなけりゃ、お前は人の本質的な願いをくみ取る心があるんだ。お前がそれに気づいていないだけさ」

「そんなもの……。私に、いつ、あったって言うのよ」

「お前なー。俺が一番大事な時に、堅気に戻る勇気を持たせておいて、忘れちゃったのか。ホントに自分の事になると、分からないやつなんだな」

一樹はそう言って、クックと笑っていた。礼似はむくれるだけだった。

御子は犯人の心を読み続けている。ハルオ達の事は、すでに片付いたと思っっているらしい。下手に追い回されるよりはいいが、それで仕掛けを止めるつもりはないようだ。さらに後続が続くと思っっているらしい。かなりしつこい性格なのか、人が傷つくのを心底楽しんでるのか。

犯人は自分の次の目標にばかり気を取られて、周りへの意識が極端に落ちている。周りは霧のように曇って見えて何処をどう歩いているのか、なかなかつかめない。

「あ、何か広い所に出たわ。今までわりと閉じられた空間を長く歩いていたのに。廊下とか……足元を気にしていたから、もしかして階段でも登っていたのかも」

「階段か。何階かは分からないか？」良平は聞いたが、

「そこまでは……。でも、匂いがする。これって化粧品の匂いだわ。たぶん一階の化粧品売り場」

犯人の意識が視界に入ってこなくても、嗅ぎとった匂いは意外と伝わるものらしい。五感を感じ取ろうと必死なせいもあるだろうが、人の嗅覚も侮れないものだ。

「爆発物、仕掛けてるわ。外の入り口から入る人を狙うつもりみたい」

「何かあれば警察は外から強引にでも入るしかなくなるからな。それを狙っているんだろ。ハルオに知らせよう」良平はハルオへとメールを送る。

それからしばらくは、犯人が移動し、何かを仕掛ける度にハルオにメールを送る事を繰り返した。

御子は犯人の思念を追い続け、かなり精神力を消耗している。由美も時折疲れたように首をうなだれると、心配そうに寄り添って来

るこてつに、そつと顔を寄せている。悪い感情を感じ取り続けるのは、かなり疲労を伴うようだ。真見もウトウト眠っても、何かに反応したようにすぐにぐずりだす。

良平は歯がゆかった。女三人、こんな小さな幼子までが犯人の悪感情と戦っている。御子もこんなに長い時間、離れた人間の感情を読み続けるのは初めてのことだろう。どれだけの負担が彼女を襲っているのか分からない。自分は言われた事を、メールで打つだけで全く何もしていないのも同然だった。

近くで店員たちや、子供の親たちが、絵本の読み聞かせを始めている。他の大人達も見ず知らずのものたち同士、励まし合っている。こてつでさえ、由美のそばで心配そうに寄り添ってるじゃないか。それなのに俺は何もできやしない。こんな時、自慢の腕っ節も、ドスさばきも、なんの役にも立ちはしない。自分だって、妻や子、由美や、ここににいる人たちを守りたいのに。そんな思いから来る焦りが良平に襲い掛かった。

俺、なんのために御子のそばにいるんだ？ 一瞬、気が弱くなる。

不意に、御子が良平に寄りかかってきた。消耗が激しいのだろうか？

「疲れたか？ 真見だけでも、抱いてやろうか？」良平はそう聞いたのだが、

「違う。疲れてるのは良平の気持ち。つらいのは分かるけど、ここは頑張つて。私達を守りたい気持ちを最大限に高めてほしい。良平のそういう気持ちを頼りに、私、犯人の心を追っているんだから」

「俺の……気持ち？」

「そう。言っただでしょ？ そばにいてほしいって。私にとって、良平が何としてでも私達を守ろうとする温かい気持ち、犯人の冷たい感情に立ち向かう、唯一のよりどころなの。その気持ちを弱めないで。それがなければ私の力なんて、なんの役にも立たないんだか

ら」

「御子……」

そうか。今、俺は揺れてはいけない。御子にとって、今は俺だけが心を預けられる存在のはず。俺の 御子と真見を守りきる覚悟が、御子を支えているんだ。俺は御子を信じ、自分の心を信じよう。

誰かを守るために本当に必要なもの。それはきっと信念と……希望だ。

香はフロアを一回りして戻ってきた。他に爆発物らしきものは見当たらなかった。ハルオ達と落ち合うと、二人は視線こそ合わせずにいたが、落ち着いた状態で香を迎えた。

間もなく良平からのメールを受けて一階へと上がり、化粧品売り場の爆発物を探し出した。慎重に処理をすると、良平のメールに従って、次々と他の爆発物も処理をしていく。

爆発物は被害の拡大を狙ってか、ガラス製品の棚の下にわずかにはみ出したところや、トイレの片隅など、鏡や壊れ物の多い、いかにもうつかり触れそうな所に巧妙に仕掛けられていた。御子の連絡がなければ、慎重に歩いていても一つぐらいは引っ掛けていたかもしれない。

途中で人に出会う事もなかった。御子達のいるフロア以外は、皆脱出に成功したのだらう。少なくとも自分達は誰とも会う事は無かった。

智は不満そうながらもハルオや香に突っかかる事もなく、黙って二人の指示に従っている。ハルオが智に向ける視線が、やや、きつくなったような気が香はしたのだが、それを聞いている余裕は無い。次々と移動して歩く犯人を、爆発物に気を付けながら追わなくてはならないのだから。

すると、良平からメールの内容が変わった。爆発物は無視して、上階の子供用品売り場に来い、と書かれている。

「御子さん達が閉じ込められているところよね？ 何かあったのかしら？」香が言う。

メールの短い文では詳細は分からないので、不安がよぎる。「と、とにかく、い、急ごう」

ハルオはそう言ったが、何処に罠があるとも分からないし、階段

を上がるほどに瓦礫や物が散乱して、道のりは単純ではなくなっていた。おそらく犯人とは離れる一方だろう。

それでもどうにか三人は子供用品売り場のあるフロアに辿り着いた。中から人のざわめきは聞こえるのだが、おかしい形に変形した分厚いシャッターと、防火扉にさえぎられて、フロアの中には入れない。

だが、扉の隙間から、御子が顔をのぞかせた。こてつが潜り込んだ、あの隙間だ。奥に真見を抱いた良平や由美の姿も見えた。

「よ、良かった。け、怪我がなさそうで」ハルオも御子の顔を見て安心した。

「ええ、中の人は全員無事よ」

「かなり人が中にいるみたいですね」香も隙間を覗き込む。

「三十人くらいはいると思う。小さな子どもや、年配者もいるわ」

「どこからも出られませんか？小さな子どもだけでも」香はそう聞いて見たが、

「やってみただ、無理。この隙間からこてつが入ってきたのが精いっぱいね。避難用具も瓦礫の向こうで吹っ飛ばされたみたいだし」御子はそう言って瓦礫の方に目をやり、ため息をついた。

「お、俺達を、こ、ここに呼んだのは……」ハルオが本題について聞く。

「やっと犯人の意識が、爆弾に向いたの。でも、分からないのよ」

「わ、分からないって、な、何が」

「意識が二つの場所に分かれてる。このフロアの真下と、屋上と。

どちらかのスイッチが入れば、もう一つも爆発するらしいんだけど、犯人がどっちに向かったのかも、どっちが本命なのかも、分からないの。いくら心を探っても、何故だかそだけ読めないのよ」

そういいながら、御子は目頭を指で軽く押さえた。今も犯人の思念を追っているに違いない。少しいらだった表情だ。

それは少し前の出来事だった。御子は犯人の思念を探っていたが、それまでは湧きあがる憎悪と、爆発物を仕掛ける事に集中して見えてこなかった本命の爆弾のイメージが、ようやく御子の脳裏にも浮かび上がってきたのだ。

これで爆弾の仕掛け場所が分かる。

そう思っただけにそのイメージを探ってみるのだが、何故か爆弾のイメージに心を集中しようとすると、深い霧がかかったようになって、そのイメージが薄れて行ってしまうのだ。

何度も繰り返し集中するが、どうしても霧がかかって、その部分だけ読めなくなる。それでも、犯人が仕掛けようとしている場所が、この階下の、スポーツ用品売り場と、屋上らしいと言う事だけはちらりと見る事が出来たのだ。

「どういう事かしら？ 肝心のところだけ、極端に読めなくなるなんて」御子も戸惑うばかりだ。

「とにかくどの爆発物よりも危険な爆弾が、その二か所に仕掛けられる可能性が高いんだから、犯人はそこに向かっていているはずだ。ハルオ達に犯人を探し出してもらおう。ここまで分かれば人手も多い方がいい。会長にも知らせて、探す人間を増やしてもらおう」良平はそう、提案した。

「その方がいいわね。私の携帯は、もう、電池切れだわ。良平、ハルオにメールして。それから会長にも」

「ついでに奥様の声も会長に聞かせよう。心配しているだろう。奥様もだいたい疲れているはずだ。夫の声が聞ければ、心強いだろう」

「そうね。防火扉の隙間でハルオ達を待ちましょう。外の様子も聞きたいわ」

こうして御子と良平は、ハル才達を自分たちのいるフロアへと呼びだしたのだ。

由美は良平に促されて、夫に電話をかけた。

「もしもし？ あなた？」

「どうした？ 何かあったか？」会長の声が切羽詰まる。

「大丈夫、全員無事よ。勿論こてつもね。元気な声をあなたに聞かせた方がいいって、良平さんが言うから、電話しただけ」会長の声を察したのか、こてつまで「ワン！」と元気な声を出す。

「そうか。いや、無事ならいいんだ。必ず助けが行く。お前もこてつも、御子や良平の言う事を聞いて、おとなしく待っていなさい」会長もホツとした声を立てる。やはり直接声が聞ければ安心感が違った。

「子供じゃないんだから、大丈夫よ。それよりも、御子さんが応援の人をこのフロアの下と、屋上に送ってほしいそうよ」

「分かった。すぐに行かせると言ってくれ」

会長はごく普通に返事をしたのだが、それがかえってまずかった。「ねえ、どうして、おまわりさんじゃなく、あなたに応援を頼むのかしら？ 本当なら救助の人にこつそり来てもらうのが一番いいはずなのに」由美は当たり前の質問をする。

「あ、いや、その。私の社の部下たちは、本当によくできていて、お前達がこんな事に巻き込まれているのを、真底心配しているんだ。どうしてもお前たちを直接助けたいらしい」

かなり苦しいいい訳だが、他になんて言えばいいんだ！だが、このいい訳で納得してしまうのが由美である。

「まあ……。なんて素敵な社員さんなんでしょう。でも、そんな人たちに無理をさせてはダメよ。絶対に危ない事はさせないでくださいね」由美の感激した声が会長に伝わった。

「勿論だ。……私にとっても、かけがえのない人間達だからな」

この言葉は、おそらく会長にとっても、本音であるに違いなかった。

「外の様子はどうか？他に取り残されている人はいなかった？」御子は香に聞いた。

「いないみたいです。少なくとも私達は会いませんでした。爆発物を探していたから、結構見て回ったと思うんですけど」

「爆発の後、速やかに避難出来たんだろう。ここの従業員なら、落ち着いて誘導できただろうから」

良平は今までの従業員たちの様子から判断した。御子もうなずく。

「あとは私達だけってことね。でも、まず爆弾を何とかしないと。他の仕掛けの火薬は少量に抑えて、本命にありったけの火薬を使ってみたいたから、かなり危険な代物だと思う。もし、爆発すれば、最初の爆発より、大きいかも」

「そ、そうだな。も、問題は、ほ、本命が屋上か、し、下の階か」「考えても仕方がない。探るのは御子に任せて、早く爆弾が犯人を見つけ出してくれ。会長に応援も頼んだ。場所が二か所に絞られたんだ。少しは見つけやすいだろう」

良平にそう言われて、三人は早速手分けして爆弾を探す。今までの爆発物の隠し方から、ありそうな場所を見当つけて探す事にした。

三人はこれまで爆発物のあった所と似たような所を念入りに探し回った。ベンチの横、商品棚の下、柱の陰、化粧室の洗面台の上。そんな所を中心に探すか、今までと同じ爆発物はあっても、肝心の爆弾は見つからない。結局三人とも元の防火扉の隙間へと戻ってきた。

「意外と見つからないわ。探し方が悪いのかしら？」香は首をひねったが、

「考え方が間違っているのかもしれない。今までの爆発物は、誰かが見つけて傷つけられる事を前提にしかけてあったんだろう？だ

が、本命はそうじゃないはずだ。爆破されるまで誰にも見つからずにおかなければならないはずだ。もっと目につきにくい所に隠されているんじゃないだろうか？」

良平が考えながら言う。確かにそうだ。今までとは犯人の目的が違ふ。

「は、犯人をつ、捕まえれば、は、話は早いのに」ハルオも忌々しげに言う。

「犯人だって、爆弾のそばにはいないだろうしね。どこか逃げやすいところでなりを潜めているのかも」

御子もそう言いながら犯人の居場所を探ろうとしていた。

「あんた達、随分前向きな発想するんだな」御子の言葉を聞いて、智が言った。

「ど、どういう事だ？」ハルオが聞き返す。

「こんな事件を起こすような奴だ。自分の人生に未来なんか見ちゃいないだろうよ。そんな奴なら今更逃げようなんて発想、ないんじゃないか？ 目的さえ遂げれば捕まってもかまわないだろうし、ひよっとしたら自殺志望者かもしれない。派手に世の中を騒がせて道連れを狙ってんじゃないか？」

智の言葉に全員が驚く。しかし考えてみればそっちの発想の方が、ずっと犯人の考えに近そうだ。

「じゃあ、何処にでも隠れている可能性があるわね。見つけるのは大変だわ」

香ががっかりとした声を上げた。

「逆に、爆弾の近くにいないんじゃないのか？ へたすりゃ、持って歩いているかもしれない。最後には確実に目的が達成できる事を望んでいるかもしれない。俺が死ぬならそのくらいは考える」

智の言葉に皆、一時黙り込む。智の目が極端に暗くなったからだ。御子は犯人の心を読む事が出来ても、その異様な心情は理解しかね

る。しかし、智は心が読めずとも、犯人の発想は理解できるらしい。世の中への恨みは、智も爆弾魔と同じように持っているようだ。

御子は考え深げな表情を見せた。

「たしかに……。そう考えれば分かりやすいわ。肝心の爆弾の部分だけ心が読みにくくなるのは、犯人が死を望んでいるからかもしれない。望んでいるのに、恐れてる」

「誰だって死ぬのは怖いもんね」香もうなずく。

「たとえ死を覚悟していても、最後の瞬間への恐怖は逃れられないはず。最後の爆発を目的にしながらも、その瞬間は考えたくない。だから爆弾のイメージだけが霧にかすんで見えなくなるのかも」

御子は考えながらも、この推測は外れていないと思った。

「そ、そんな事なら、ば、爆死なんて、か、考えなきゃいいんだ」ハル才はそう言ったが、

「絶望は理屈じゃない。続く絶望より、死の恐怖の方がマシだろうし、そんなこと考えるより、世の中を呪う方がもつとマシなんだろ。あんたらみたいな人間には分からないさ」と、智が言い返した。

すると、「分かるわよ。少しは」

と、香が言った。智以外の全員が目を見かわす。香の生い立ちなら、世の中を相当恨んだ経験もあったに違いない。智だけが怪訝な顔をした。

「でも、その考えは間違ってる。絶望なんてただのへ理屈。命さえあれば心の持ちようであくくでも希望に変える事が出来るんだから。望みを捨てるなんて、ただのあきらめと、逃げだわ」

香は吐き捨てるように言った。

「逃げなきゃやってられない奴も、世の中ごまんといるぜ」

香の言葉に智が突っかった。どうしても智は香に突っかからずにはいられないようだ。

「別に逃げたっていいのよ。あきらめさえ、しなけりゃね」

香は智をしっかりと見据えて言った。ハル才は二人のやり取りに憚然とする。

「まあ、そう言う事は犯人に直接言ってやろう。とにかく犯人を捜

し出すのが一番なようだ。御子の能力にも限界がある事も分かったんだし」

三人の様子が険悪になって来たのを察した良平が、そう言って話を打ち切った。今は内輪もめや、人生観を論じている場合じゃない。「そうね。犯人、このフロアの人間ごと、吹っ飛ぶつもりでいるんだから。早く探さない」と

御子がフロアに残った人たちの方を振り返りながら言った。

「もうすぐ会長が送ったこてつ組からの助っ人も来るはずだ。頭数は増えるんだから、しらみつぶしに探してくれ。何か分かればメルすればいいから」良平もそう言つと、三人を見送った。

ハル才は早速智に命じた。

「お、俺と、香で、お、屋上を探す。さ、智は下の階を探せ。む、無茶、するんじゃないぞ」

ハル才にそう言われて智は思わず、

「命令すんなよ」と言つたが、

「お、お前、ど、土間さんに、な、なんて言われた？」と、聞き返される。

「……あんたの、手伝いをしろ」

「わ、分かつてんじゃないか。た、頼んだぞ」

ハル才はそう言つて香と共に、屋上に向かって階段を上る。

「あいつ、大丈夫かな」

慎重に階段を上りながら、香が聞いた。まだ、何処に仕掛けがあつてもおかしくないからだ。

「こ、こてつ組の助っ人も来るんだ。だ、大丈夫だろう」

「ね、ハル才。怒ってる？」

「べ、別に。な、何で？」

「うっん、何でもない。ただ、ハル才が命令口調でものを言つて、珍しかったから」

「お、怒ってないよ」

表情が一致しないまま、ハル才はそう言った。

ハルオに言われて、やむなく階下のフロアに向かった智は、それでも慎重に階段を下っていた。

口で不満は言ってはいるが、確かにケンカでテンションをあげた状態での度胸と、こういう時の注意力や、判断力を伴う度胸では質が違うと言う事が、ハルオ達とここまで来るうちに智にも体感として飲みこめるようになっていた。

だが、それで言われっぱなしでいられるかと言えば、それは別だ。まして、自分と同じくらいの年周りの女、香に言われては、どうしたって腹ただしくなる。

初めはあいつがハルオの女だから、何を言っても気に入らなく聞こえた。はつきり言えば、何も言わなくなつたって、あの、ハルオの味方だと思うだけで最初から気に入らなかつた。

おまけに俺は、あいつの喧嘩の相手にさえなれない。あのすばしっこさにはかなわないのを、嫌ってほど思い知らされてしまった。これで腹ただしくない訳がなかった。

フロアに出て、爆発物に注意しながら、スポーツ用品売り場を探す。こてつ組の助っ人らしい数人と落ちあつて、爆発物の内容を知らせ、手分けして爆弾を探す。

ひよつとしたら犯人と出会うかもしれない。そんな緊張感が走る。余計な緊張で爆発物を見落としたら危険だ。

気持ち落ちつけようと、考えを犯人から逸らそうとすると、香に最初にやられた事を思い出した。

最初に香にあしらわれた時。もしも、香ではなく、直接ハルオを襲つてあしらわれたのなら、どんなにコテンパンにされたとしても、何度でも自力で立ち向かおうと思つたんじゃないだろうか？

ところが運悪く、俺はあいつに先にあしらわれてしまった。ハル

才にたどり着く事さえできない内に、あいつとの差を先に思い知らされてしまった。しかもあいつはハルオの女なのに。

こんなに悔しい事があるもんか。

だから、どんなに癪に障っても、俺は華風組の門をたたかずにはいらなかったんだ。

あいつに「こんな程度で、よく、ハルオを狙う気になったもんだわ」と言われて、本当に納得してしまった。今のままじゃ、絶対ハルオにも、あいつにも敵わない。あいつの言葉には何故だか、いちいち説得力がある。

さっきだって、「絶望なんて、へ理屈」と言われて、カチンときた。別に、俺に向かって言われた訳じゃないし、他の奴なら、お幸せなこった、と思つてやり過ごせるが、あいつが言つと、こつちの考えの方が甘いように思えて来る。

俺は親父に死なれた事に絶望した。俺が越えるべき目標だった上、恨みの対象でもあった親父が、あっけなく刺殺された事を、俺は認めたくなかなかった。

その現実から逃げかけた。だが、それじゃ終われない。だからハルオを新しい目標にした……はずだった。

あの、香つて女。あいつも多分、何か絶望を味わった事があるんだろう。そして俺のように、新しい目標を見つけ出したに違いない。だが、あいつは何か、俺よりも上回っているものがある。癪に障るが、何かをもっている。どうしてもそんな気にさせられる。だから、言い返さずにはいられなくなるのだ。

スリの腕や、すばしっこさに、自信があるからだろうか？ それともハルオがそばにいるからだろうか？

畜生。俺だつて、もっと強くなつてやる。何かを手に入れてやる。
いつの間にか、智の当座の目標は、ハルオより先に、香に変わつてしまつていた。

人の言う事に聞く耳を持たない智を、一人にするのは気が引けたが、それでも智を香から離すとハルオはホツとする事が出来た。

土間さんが智をよこしたのは、智をそれだけ信用しようとしているのだろうか？ 確かに智は反射神経も、集中力も、悪くは無かった。ようは物事を舐めてかかるから、判断が甘くなったり、動きが鈍ったりして、自らピンチを招きがちなのが問題なんだろう。俺と違って度胸もあるし、土間さんが鍛えてみてもいいと言う気になるのは、分かる気がする。何より、積極性があるし。

そうだ。刃物嫌いで、香にドスを預けてしまう俺なんかよりは、ずっと、鍛えがいがあるに違いない。

刃物が好きじゃないのは俺の性分。土間さんは刀使いだ。俺は長さのある刀は身体になじまないし、実の息子だからって、合わないものを無理やり押し付けようとしなのは、土間さんの正しい判断だ。

土間さんが智の方に目をかけるのは、刀使いとして当然じゃないか。

小さな子供じゃあるまいし、親の愛情を比べるなんて、馬鹿げている。

だが、智の神経が自分よりも香に偏ってきている事に、ハルオは気がついた。

気がつかない訳がない。智はハルオの前で香を脅してみせた。あれは俺に対して脅すと言うより、香を黙らせようとした行動に思えた。智にとって、俺の態度よりも香のちよつとした言葉の一つ一つの方が、よっぽど気にかかっているらしい。

「か、香。お前、さ、智が気になって、しょ、しょうがないんだろ？」

そんな事聞いている場合じゃないのに、つい、口に出た。香はあきれた顔をする。

「怒ってんのは、そのせいなの？ ハルオって結構やきもち妬きだね。一樹さんの時といい」

「そ、そう言う事じゃ、な、ない。わ、分かってんだろ？ ど、土間さんも、あ、あいつは、き、気にしてる。お、俺だって、き、気になる。ちよっと前の、か、香にそっくりだ。あ、危なっかしくて、しょ、しょうがない」

そう。ハルオは香の気持ちがよく分かった。ほんの少し前の自分の愚かさを、香は智に見ているに違いない。智が自分を軽んじたり、物事を甘く見たりするたびに、昨日の自分を見るようで、放っておけない気持ちになっていくんだろう。

ハルオだって少し前まで香をそういう思いで見っていたのだ。そして、それが魅力的でもあった。

「ハルオこそ分かってんなら聞かないでよ。土間さんはハルオを信頼して智を任せたのよ。それに私、あいつがバカやりそうになるたびに、自分を思い出して、顔から火が出そうなくらい恥ずかしいんだから」

そこまでは仕方がない。自分だって一緒だ。問題はその先だ。

「お、俺は、あいつ、き、嫌いだ。か、香の傷を、あ、あんな脅しに使うなんて」

嫉妬丸出し。みつともないとは思うが、言葉が苦々しげになるのはどうしようもない。

「ハルオったら、まだこの傷のこと気にしてんの？」

香は少しおどけた調子で言った。それはもう、終わった過去の事だと強調するつもりで。

ところが、香の言葉を聞いたハルオの顔色が、はつきりと変わった。要らない事を言ったと顔に書かれている。視線さえもそらし、唇をかむ。これには香の方が面食らった。

「き、気にしちゃ悪いか？ さ、智は馬鹿素直だから、ああもはっ

きりと態度に出すんだ。他の奴等は口にしないで、香をそういう目で見てるんだ。それを悔しく思うのはどうしようもないだろう？」「ハルオのどもりが止まった。

悔しい？ ハルオの方がこの傷の事で、苦しんでる？

香は驚いた。そして自分のあさはかさに気づく。

この傷は私にとっては勲章。そう宣言して、香は傷を隠すのをやめた。その方がハルオも気に病まなくて済むと思っていた。

女の子は自分の容姿を気にするもの。それは確かにそうなのけど、ずっと容姿を気に留めているだけに、逆に割り切りも利いてしまっているところがある。

ルックスが良ければ、色目で見られるし、そこを利用する事も憶えてしまう。でも、悪ければ悪いで、人の目なんてそんなもんだ。損はするけど仕方がないって思ってしまう。

傷の事で同情を買いたくない。そんなものでハルオの気を引きとめたくない。ハルオの気持ちに同情だけなら、屈辱も同然。そう考えていた。

だけど、どうやらこの手の事は、男の方が気になってしまいうものらしい。そういう目で見られる事を、自分はそんなに気にしないようにしても、ハルオは悔しがっている。

この傷の事で本当に傷ついているのは、私より、ハルオの方かもしれない。

そんなことにも気付かずに、傷をさらして歩いてしまっていた。

今までどれほどハルオを傷つけていたんだろう？

香は足を止めた。ハルオも慌てて止まって、香を振り返る。

「ごめん。私、ハルオがそんなに気に病んでるなんて、思ってた。傷で同情受けたくないって、ずっと意地張ってた。……ハルオの気も、知らないで」

香はうつむきぎみになって、そう言った。今、正面からハルオを見るのは、何だか違う気がする。

今度はハルオの方が驚いた。嫉妬と悔しさから余計な事を言ったのは自分の方で、香が謝ってくるとは思っていなかった。

「ど、同情受けて、い、いいんだよ。そ、それだけの目に、あ、あったんだから。そ、それに、原因作ったのは、お、俺なんだ。ほ、本当なら、か、香に嫌われてる」

嫉妬どころじゃない。俺、女の子相手に、なんて話を持ち出したんだ。同情受けたくないって事は、それだけ意識してる裏返しじゃないか。

「そんな事じゃ、嫌いにならないよ。ハルオの気持ち、ただの同情だけだったら許さないけど。違うでしょ？　ハルオこそ、私が傷をさらして歩くの、本当は苦しかったんだね。こんな私と一緒にいると、つらいんじゃないの？」

香は顔を上げないまま言う。俺もバカだな。智を笑えない。俺が香に傷を気にさせてどうする？　香は俺がどんなに大事に思っているか、ちゃんと知ってくれているのに。

「つ、つらくなんかない。お、怒らずに、き、聞いてくれ。お、俺、この傷のおかげで、す、少し安心なんだ。他の奴に、か、香を意識、させたくない」

ハルオの慌てた言い方に、香は「ブツ」と噴き出した。

「怒った方が好みのくせに。しかも、やっぱり、やきもち妬きだわ。ようやく香が顔をあげて笑った。

「も、もうひとつ。か、香の好きなところがある。この傷が、俺、大好きだ」

そう言っただけでハルオが香の傷跡に、そつと唇を寄せる。

「怒り顔がいいとか、傷が好きとか。ホント、変わってるんだから」
香はつい、そんな言葉が出た。

やっぱり、傷を隠さなくていいや。ハルオがここまで言ってるんだもん。

でも、こんなことしてる場合じゃ、ないはずなんだけどな！。

ハルオと香が屋上に着くと、こてつ組の若い者が間もなく追いついてきた。

「土間さんに、これをあんた達に渡すように言われてきた」そう言っ
て、何かのコピーを渡される。

開いて見るとデパートの各フロアごとの詳細図だった。

「例の料亭の女将が、中野に頼んで手に入れた。このデパート、昔中野が手掛けたんだ。電話一本でコイツを用意してくれたそうだ。中野が料亭にいる時で助かった」

確かにこれは助かる。自分たちでは気がつかなかった物置らしいスペースや、機械室の間取りまで書かれている。爆弾を探すにも、犯人の隠れ場所を探すにも、これは役に立ちそうだ。

「これ、下の御子さん達や、智のところにも……」香が若い者に聞くと、

「勿論、コピーを渡しに行ってる。警察の機動隊や、救助の人間も、マスコミに規制をかけてこっそり潜り込んだ。体制は万全だ。あとは犯人を刺激せずに、捕捉するようにしないと。でなけりゃ全員、お陀仏だ」と、若い者も緊張している様子。

「ああ、それから、ハルオに華風組長から伝言だ。智は詰めが甘いところがあるから、いざって時には頼むと言っていた。あんたを信頼しているそうだ」

「ど、土間さんが？ わ、わざわざ？」

「どうしても伝えてくれとよ。あんた、戸惑ってるかもしれないからってさ」

これを聞いた香がニヤニヤする。

「土間さん、ちゃんとあんたも心配してるじゃない。良かったね。身内に心配してもらえて」

言われたハルオも照れくさそうに、

「か、香だつて、れ、礼似さんが、き、きつと、心配してる。う、強引に、ここに、い、いるんだから」

と、言い返した。

「あー、そうだった。きつと、怒られるなー」

「じ、自業自得だろ？ お、おとなしく待ってないから。し、しかつてくれるのは、し、心配してる証拠だ」

「だって、あんた達二人を黙って見送ってなんか、いらなかったもん。ハルオになんかあったら、一人で取り残されたくないか、ないもんね」

「だ、大丈夫だよ。ちょ、ちよつとは信用しろ」

「そんなの、お互い様」

香が軽く舌を出して笑う。だが、一転して、

「智、大丈夫かな」と、心配そうに言う。

「だ、大丈夫だろう。こ、こてつ組の若い者もいるし、しょ、詳細図も手に入った。そ、それにあいつは、は、犯人の考え方が分かってる。あ、案外、み、御子よりも今は、た、頼りになるかもしれない」

すると、その御子からメールが来た。

犯人、中に人が増えた事に勘づいた。うろたえて逃げ回ってる。刺激、しないように。

「お、大詰めだな」ハルオの顔に、緊張感が増した。

御子が思念を追っていると、犯人が動揺したのが分かった。霧がかかったようになっていた視界がはつきりとして、何かの物陰から人の動きをうかがっているのが感じ取れた。見える人影はヘルメットをかぶり、制服っぽいものを着ているようだ。こてつ組の人間じゃない。おそらく、警察か何かだろう。

（やっと来たな。見つからないように逃げよう。多少は仕掛けに引っ掛かる奴もいるだろうが、やっぱり派手にやらないとな。もっと上に近づいてもらわないと）

上？　では犯人はまだ階下にいるのね。上というのはこのフロアの事かしら？　それとも、もっと上の方？　御子は良平にハルオ達や、智にメールを送ってもらい、さらに心を深く読んでいく。

前にちらりと見えただけだったイメージが、より、クリアになって頭に浮かぶ。これはあの、スポーツ用品売り場。このフロアの真下だわ。

さっきより犯人の意思が明確になっている。きっとスポーツ用品売り場に向かっているに違いない。そこにはこてつ組の若い者と、智がいるはず。犯人を刺激せずに、うまく見つける事が出来るかしら？

良平にその事を伝えてもらう。とにかく、安全に犯人を捕捉したい。

しかし犯人も、どうしてだか智たちの目をうまくすり抜けているようだ。人の動きに目を凝らしながら、物陰から物陰へと、身を隠し、進んでいく。どうしてこんなにうまくすり抜けるの？

（フン。てめえらのぼんくらな目じゃ、俺は捕まらない。この事は隅から隅まで知っている。俺をこんな売り場の係りにした、俺の上司を恨むんだな）

なかなか見つからない訳だわ。犯人はこの従業員。あるいは元従業員だったのね。そして犯人はその事に不満を持っている。何か、見下されたと思って、恨んでいるんだわ。

ああ、智達、犯人のすぐ近くにいるのに。向こうが一枚上手で、距離は近いのに気付かれにくい位置でうまく視線をすり抜けてる。

それに、何か爆発物をまた、仕掛けようとしている……。今、仕掛けた！

（こいつは後まで取っておきたかったが。お前らのしつこさへの敬意として、喰らわしてやるよ）

「良平！ 智たちに早く知らせて！ 犯人、智たちを狙って、爆発のタイミングを計ってる！ 逃げるように言って！」

メールじゃ間に合わない。良平は智に電話で知らせる。

犯人はスポーツ用品売り場にいる。そう書かれた良平のメールを受け取ってから、智はスポーツ用品売り場をくまなく探しまわる。そうは言っても広い売り場の中。しかも陳列棚だらけの中では、人一人探すのも容易ではない。

場所柄、背の高い商品なども多く、フロアの見通しも悪い。ここを狙うなんて犯人も悪知恵の働く奴らしい。

そこに良平からの切羽詰まった電話が入る。

「お前たちを狙って、何か爆発させる気だ！ 早く逃げろ！」

智は息を飲んだ。

逃げろと言ったって、どっちへ？ 爆発物はどの辺に仕掛けられているんだ？ やみくもに逃げたって、へたすりゃ巻き込まれるだろう。

落ちつけ。俺が犯人だったらどう考える？

この犯人は派手好きだ。俺と同じで力を人に誇示するのが大好きな奴だ。しかも人を多く巻き込む事を、いつも念頭に置いている。俺だったら、他の奴を多く呼び寄せるやり方を選ぶ。

どうすれば人の注目を集められる？ 外にはマスコミがいて、へりまで飛んでいる……。

「窓辺だ！ 窓辺から離れるんだ！」

智はこてつ組の若い者にそう叫んだが、

「窓だったって、何処にあるんだ？」

こういう店、特有のディスプレイのせいで、何処が壁で、何処が窓かも判然としない。

「詳細図を見て、窓の場所を見つけれ！ そこからなるべく離れるんだ！」

若い者が詳細図を睨む。

「南だ！ この、左側が窓だ。離れる！」

若い者が指さした方角と、反対の方向に全力で駆け出す。そして大きな柱の陰に身を隠すと、

ドーン

大きな音と、地響きの中、ガラスをまきちらしながら、その一帯が揺れた。ほこりが舞い上がり、外の空気が入り込んでくる。気づけば窓の一部がめちゃくちゃに壊れ、外の景色が見えていた。

「きゃー！」数人の悲鳴がフロアに響く。

爆発による音と衝撃は、上のフロアにも当然広がった。子供たちが一斉に泣き出してしまう。

そしてテレビではアナウンサーが興奮した様子で叫んでいた。

「爆発です！ また、デパートから爆発がありました！ 中にいる人たちは、果して無事なんでしょうか？」

無事じゃなきゃ、困るわよ！ あんた達がこうやって騒ぐから、犯人、こんな派手な真似するんだからね！ 御子は心の中で罪のないアナウンサーに八つ当たりをする。智たちは無事かしら？

「すごい、衝撃だったな」

「ここ、大丈夫なのかしら？」

予期せぬ爆発の振動に、人々は再び浮足立ってきた。それも仕方がない。ここにいる人間は、外で何が起きているのか、殆んど知るすべがないのだから。

「でも……。出られるところがない以上、ここで助けを待つしかないですね」

あれからこのフロアを仕切っていた、男性店員も、青い顔でつぶやく。不安ももう、限界にきているのかもしれない。

智達の安否も気になるが、犯人の動きも知りたい。その時御子は、犯人が向かっていている所をはつきりと知った。

「屋上だわ。犯人、屋上に向かってる」

「屋上？ ハルオ達がいる所か。本命の爆弾は、そっちか！」

良平が急いでハルオに電話をかけ……。ようとした。

「くそつ。繋がらない。さっきの爆発の影響か」

そして御子の頭の中に犯人の声が響いた。

（派手な花火に、みんな寄ってくるだろう。救助隊も、もう痺れを切らしてあのフロアに向かったはずだ。あとは最後の花火だな。これですべてにケリがつく。俺もろくでなし扱いされた割には、華のある最後になるじゃないか。ロクに物も考えない癖に、平凡な幸せとやらを満喫している奴等を、どれだけ道連れに出来るだろう？）

「犯人……とうとう腹を固めたみたい。漠然とした思念なんかじゃない。はつきりとした意思を感じるわ。この世への恨みつらみを、すべて吹っ飛ばす気でいるんだわ。我が身ごとね」

これには良平も青くなった。

「何でこんな時に限って、携帯が繋がらないんだ。ハルオに知らせようがないじゃないか！」

「電話じゃなくてもいいわ。何か、ハルオに知らせる方法があればいいのよ。放送でも、伝言でも」

御子も焦りが見え始める。犯人の心情が、それだけ切羽詰まって来たのだろう。

こうなってしまうては、智達が無事で、連絡がついたとしても、機動隊や救助隊の動きを止めることはできない。それに、救助隊がこれ以上遅れたら、このフロアにパニックが起きかねない状況だ。なんとかしてハルオに犯人の爆破を阻止させたい。でも、どうやって知らせたらいい？

「見えた！ 爆弾の場所が分かったわ。小熊の形の遊具。その、座席シートの下だわ」御子が叫んだ。

畜生！　ここまで分かっているのに。誰かが伝えに行ければ……。

誰か？　この際、人でなくてもいい！

「こてつだ！」良平が叫んだ。

「こてつなら、あの隙間を通ってハルオの元に行ける。幸いこてつもハルオの事は知っている。伝言を伝えられるはずだ」

良平の言葉に、御子と由美の視線がこてつに向けられる。

当のこてつは、後ろ足で耳の後ろをのんびりと搔いてあくびをしていた。

こてつ組の組長室で、礼似はテレビに見入っていた。その画面の中が突如、騒がしくなる。

突然の衝撃音に続いて、画面越しにレポーター達の慌てふためく姿が写り、カメラが切り替わると、そこには壊れた窓ガラスと、もうもうと立ち煙るほこりが映し出された。

画面の中で叫ぶレポーターを横目で見ながら、礼似は御子達に電話をかける。しかし通話は繋がらなかった。土間のかけたハルオや智の番号も同様だ。

食い入るように画面を見つめる礼似に、一樹が

「あそこは御子さん達のいるフロアじゃない。大丈夫だ」と、言う。

「ええ、分かっているわ。それに、ウチの若い奴等が図面を渡した事は確認できてるし、ハルオは危機回避能力が抜群に優れてる。ただ……犯人は動き始めたようね」

礼似は画面から視線を外さないままそう言った。

犯人は最初の爆発から今まで、派手な動きは控えていた。それが、窓ガラスを吹っ飛ばすなんて目立つやり方を選んでいるのだから、何か明確な意思の表れに思える。そろそろ本気になったのかもしれない。礼似は息を飲んで画面を見つめた。

「お前を行かせる訳にはいかないが、どうしても我慢できないなら、俺と大谷が行って来るが？」

一樹の言葉に礼似は一瞬黙り込んだ。画面から目を離し、一樹を見る。土間や大谷も同様に一樹を見た。しかし、

「ううん。黙って待つわ。待つと決めたら待つ。組長が危険にさらされる人間を増やしたんじゃ、お話にならない」

そう言って礼似は再び視線をテレビ画面へと戻した。

「任せた以上、連絡が取れようが、取れまいが一緒よ。下手に犯人を刺激する方が怖い。そうでしょ？ 土間」

「え？ ええ」急に返事を求められて、土間が慌てた。

「でも、さっきまで分かっていたても我慢できないって、言っていたのに。どういう風の吹きまわし？」

土間が意外そうに言うと、

「やれることはやったから。助っ人も送ったし、料亭の女将から詳細図も手に入れた。それも確実に御子やハルオの手に渡っているわ私、これから学ばなきゃならないのよ。人に任せながら、全力を尽くすって事を。今までみたいに何でも最後は自分でケツを拭けばいいってもんじゃない。任せた事の責任を、自分の心で受け止める、その覚悟を学ぶの。そのための全力は尽くした。御子達は私の手なんか望んでいない。必ず自力で帰って来るわ」

礼似是最後の言葉に力を込めて言った。それを聞いた土間もほほ笑んだ。

「礼似。あんた、いい組長になれるわ」そう言って礼似の肩を、ポンとたたく。

「土間に太鼓判押してもらえんなら、心強いわ。そうよ、私、いい組長になるわ。ならなきゃいけないんだから」礼似も土間に笑い返した。

「今頃御子だつて、動けなくて相当じれてるわね。ねえ？ 御子が無事に戻ったら、今日は飲み明かそうか？」土間がそう言うと、

「クラブ・ドマンナのお酒、サービスしてくれるの？」と、礼似が聞いた。

「調子に乗らない！ あれは商売用だつていつも言ってるでしょ？ 私が自腹切つて買うわよ。あんたの組長就任祝いにね」

「いいわね。じゃあ、御子が帰ってくるのを楽しみに待つてましょ」そう言つて二人は視線を画面に向けた。鳴らない携帯を固く握りしめながら。

由美はこてつの首輪に手紙をしつかり結びつけると、その目を見て優しく言い聞かせていた。

「いいい？ こてつ。これはとっても大切なお使いなの。余計な物に触らず、道草しないで、真っ直ぐ、ハルオさんのところに行くのよ。分かったわね？」

こてつは訳が分かっていいのか、いないのか。少し小首をかしげると、由美の目を真っ直ぐ見つめて、甲高い声でワンと鳴いた。

そのこてつを例の扉の隙間に連れていくと、近くにいた子供が声をかけて来る。

「こてつ、ここから出るの？」少しさみしそうな顔だ。

「ええ、お使いだね」由美が答える。

「お使い？」不思議そうに聞き返す子供に、御子が答える。

「私達を助けに来てくれるように、お願いに行ってもらうのよ。大丈夫。きつとみんな、ここから出られるからね」そう言って、にっこり笑って見せた。

「そうなんだ。頑張って、こてつ」

そう言って子供はこてつの頭を軽くなでる。手を振る子供の姿に見送られて、こてつはあの隙間を潜り抜け、屋上に向かって駆け出して行った。

嘘も方便。子供にはああ言って聞かせたが、こてつに持たせた手紙には、本命の爆弾のありかと、犯人がいよいよ自爆の覚悟を決めた事を記し、ハルオに届けるよう、こてつに言い聞かせて出してくれたのだ。

こてつの責任は重大だ。このデパートの中にいる人間、すべての命がかかっている。犯人より先に屋上にたどり着き、ハルオに爆弾を始末させなくてはならないのだ。

下のフロアの爆発の後、やはり皆、落ち着きを失ってしまっている。自分たちの頭上に、今までの爆弾よりも強力な爆発物があると知ったら、間違いなくパニックに見舞われるだろう。

それならば、もうすぐ救助の手が差し伸べられると、希望を持ってもらう方がいい。実際、救助隊はこっちに向かっているはずだ。あながち嘘とは言えない。

これで、本当に救助隊が来るまでの間、パニックが抑えられればいいんだけど。

自分達は何も動く事が出来ない以上、御子達が出来るとはこのくらいが精いっぱいなのだ。

そのあいだにも御子の頭の中に、犯人の声が聞こえ続けていた。ずっとその声を追ううちに、自然とそこに思考の周波があっってしまうようになっていくのかもしれない。

（何が余計なことは考えるな、だ。俺はこれまで、人が考えないような事をして、うまい事やって来たんだ。考えない奴等は馬鹿だ。俺はそんな奴らとは違う。質の違う人間のはずだ）

犯人は自分の考えごとに、心を捕らわれはじめたらしい。死を意識することから、再び逃げているのかもしれない。

怒りで身体の動きが止まったのが分かる。いいわ。このまま少しでもじっとしてほしい。こてつがハルオのところにとどり着くまで、少しでも時間を稼いでほしい。こてつの道行きだつて安全ではない。全員の命を救うため、危険を承知で行かせたのだ。御子は祈るような思いで、犯人の心の声を聞いている。

（さんざん競争を勝ち抜いて来て、誰よりも要領よく掻い潜ってきた、結果がデパートでチマチマ道具を売って？ 冗談じゃない。何故俺が、その辺の子娘と一緒にになって、売り子のまねことをさせ

られるんだ？ 俺の知恵を売り場に生かせたと？ 俺は、そんな事をするために、この世に生まれたわけじゃない。俺の様な人間は、別の生き方が用意されているはずだったんだ！)

御子は真底悲しくなる。コイツ、本当の自意識過剰タイプだ。ジコチューとか、ワガママとか、そんなもんじゃない。真正正銘の、自己愛主義。世の中は自分のためにあつて、自分の考えはすべて正しくて、自分がいるからこそ、この世は成り立っていると、心から信じ切っている。

御子は千里眼のせいで、人の心の汚さも、うんざりするほどよく知っている。勿論その逆の、心の純粹さ、理屈を超えた気高さがある事も知っている。

だから多少、人のずるさや、いい加減さ。心の奥のみつともなさは、人間臭さの表れで、その中に良心と呼ばれる良い部分をもっている事こそが、人間の素晴らしさだと思っている。

だが、残念ながらごくまれに、そういう人間性が通用しない、自分以外に心を開くすべを知らない、本物の残虐さをもった人間もいる。

そういう人間は限りなく孤独だ。どんなに表面をごまかして、周りとうまくやっているように見せても、本人の心が満足していない。だって、自分が一番ではなくなってしまうから。

自己愛がすぎると、自らのプライドがこの世のすべてになってしまふらしい。しかし人の世は所詮、他者との関係で成り立つしかない世界だ。自分ひとりのための理想郷なんて何処にもありはしない。そんな当たり前の事が、本当に理解できない人間が、残念ながらこの世にはいるらしい。コイツがまさにそういう人間なんだろう。

人は、孤独を恐れる。孤独からは何も生まれない事を本能的に知っているからかもしれない。それはコイツの様な異常な精神構造をもった奴でも、変わりはない。

どうやらコイツは社会に出て、その孤独を味わい続けたようだ。当然だ。誰にも心を開いた事がないのだから。

生みの親さえ、自分がこの世に生まれるためだけの存在だと、本気で思っているんだから。

だが、それがコイツの異常さに拍車をかけている。

コイツは自分が孤独な事が理解できない。尊敬されず、あがめられる事がない事を受け入れられない。特別ではない自分が、信じら

れずにいる。

どうしてこんな奴が、物を人に提供する、流通業に身を置いたのかは知らないが、それがコイツの世の中への恨みを、一層募らせる事になったようだ。

それでも今までは、うまく仮面をかぶって、なんとかやってこれていたんだろう。真実の自分を隠し、普通の人間を演じている自分に、酔っていた節さえある。

犯人の頭の中に声が響くのが分かる。彼の上司の声らしい。

「人の信頼を得るには、自ら汗をかくのが一番だ。余計なことは考えずに、売り場のスタッフと共に汗を流してみろ」

その声が響くと同時に、犯人の怒りが燃え上がっていく。屈辱、恨み、悔しさに心が彩られていく。

そして彼はその心のままに、ここにいます。ここで、自分と共に、世の中の一部を終わらせてやろうと考えています。自分の様な有能な人間を失った世の中を生きるくらいなら、自分と共に消える奴等は幸せだろうと、本気で思っているのだ。

普通に考えれば、正気の沙汰じゃない。でも、そういう人間が、確かにここにいます。

実は私達は、ビックリするほど不安定な社会の中にいるのかもしれない。こんな異常な人間を内封しているような、社会の中に。

でも、だからこそ、こんな奴にみすみす人の命を奪わせてはいけない。コイツの思うところの頭を使わずに手に入れた、平凡な幸せを大切にしている人達が、この世の中を作り上げているんだから。

コイツの世の中への恨みは、所詮、嫉妬だ。心を開き、一定の努力を惜しまなければ、誰でも手に入れられる、小さな、でも、とても貴重な幸せを、コイツはうらやんでいる。自分がその事に気がつけば、同じ幸せを手に行けるのに、決してそこに目を留めることは無いのだろう。そんな事をするくらいなら、コイツは死を選ぶのだらう。

死にたかったら一人で勝手に死ね。本気でそう思ってしまう。

だが御子は、その考えを心から追い払う。こういう憎しみが、巡り巡って異常な考え方に、繋がっているような気がしたのだ。

私は犯人のような考えは持たないわ。香じゃないけど、絶望なんてしない。どんな心でも、どんな心理でも、考え方一つで希望に変えられる。こんな事をする犯人への憎しみはあるけれど、そんなもので人間に絶望したりはしないもの。

今、ここにいる人達を、ここにある命を助けたい。単純にそう思える。その心こそが希望だわ。

その頃こてつは、由美の言いつけどおりに、真っ直ぐ、屋上にいるハルオの元へと、階段を駆け上がっていた。ところがその先の嫌な気配を感じ取り、こてつは足を止めた。

そこには一人の青年が、うなだれて座り込んでいた。一見、居眠りでもしているように見えた。

細く、神経質そうな体型で、良く見ると何か、独り言をぶつぶつと言っている。その顔が不意に上げられて、こてつの方を見た。

それは御子も感じとっていた。

「しまった！」思わず声に出た。

「どうした？ 犯人が何かしでかしたか？」良平が心配そうに聞く。「犯人とこてつが出くわしたわ。同じ階段を使っていたなんて。こてつ、うまく逃げて！」

御子の言葉を聞いて、由美が真っ青になった。

「こてつ！ 逃げなさい！ 走って！」

隙間の外に向かって叫んだ。

そこにこてつがいる訳でもないのだが、いつもの命令をかけるよ

うな口調が出た。

こてつは青年と目があってしまってから、恐怖で足がすくみあがってしまった。青年からは、何か異様な雰囲気漂っていた。それはこてつをおびえさせるには十分なものだ。全身の毛が逆立ち、どうしたらいいのかわからなくなってしまう。

思わずそこに固まってしまっていたのだが、その時、
「走って！」

と、由美の声が聞こえたような気がした。
すると、まるで魔法が解けたかのように身体が動いた。いつもの命令をこなすように、身体が勝手に駆け出していく。

無我夢中で階段を駆け上がり、必死に走った。しばらくして踊り場で足を止め、後ろを振り返る。追いかけられる気配はないようだ。こてつはハアと深く息をついた。

気がつくとすぐ上に、屋上への出入り口が見えた。こてつはハルオの姿を求め、階段を更に駆け上がって行った。

「こてつ、走り去ったわ。犯人も追うつもりは無いみたい」御子はそう言つて、大きく息をついた。真見を抱いたまま、全身の力が抜ける。良平が慌てて真見もろとも御子を支えた。

「良かった……。こてつは無事なのね」由美も涙ぐんでいる。

「ええ。そのまま真っ直ぐ屋上に向かって行つたわ。さすがね。ちゃんと奥様に言われた事を、憶えているんだわ」

これでこてつは大役を果たしてくれる。その安ど感で、場の空気が柔らかくなった。

「勿論よ。こてつにとって私の命令は絶対ですもの」

由美は胸を張ってそう言った。

大きな音とわずかな振動。それは屋上の出入り口に集まっていた、ハル才達のところにも伝わった。階下でなにか、爆発があったらしい。

音の大きさに驚きこそしたが、下の階のガラスが吹き飛んだのは分かったが、建物の大きな損傷は起こった様子がなかった。どうやら本命の爆発とは違うようだ。

しかし、爆発がどこで起こったのか、ハル才達には分からない。もしかしたら御子達のいるフロアか、智達のいるフロア、ひょっとしたらさらに下の、救助隊に向けられたものかもしれない。

ハル才は早速良平の携帯に電話をかけたが、通話が繋がらない。智の番号も同様だった。

下のみんなは大丈夫だろうか？ 不安はある。そこにいた全員が顔を見合わせた。

「私、下に行つて、御子さん達の様子を見てこようか？」香はそう聞いたが、

「い、いや。もう、た、単独行動は、さ、避けよう。い、今の爆発が、ほ、本命じゃないって事は、こ、ここに本命が隠されてる、か、可能性が高まったって、こ、事だ。し、下の無事を確認するより、ば、爆弾探しが先決だ」

心配な気持ちはある。だが、本命が爆発しては、全員の命に関わる。下の人間の無事は、今は祈るしかなかった。

ハル才達は早速手分けをして、爆弾を探し始めた。今までの物を考えると、時限式や、離れた場所から起爆させるような、複雑さをもった爆発物は考えにくい。火薬の量は違えど、振動や、ちよつとしたタイマースイッチで起爆する、単純な作りの物に違いないだろう。

と、言う事は、見つけてさえしまえば、所詮は火薬。起爆部分を

外すなり、濡らしてしまうなり、消火剤で包み込んでしまうなりすれば、大爆発は避けられる。それぞれが備え付けられていた消火ボンベを手に、探し回った。

人目につく場所ではないだろうと言う事で、図面に載っている、機械室やボイラー室、屋上イベント用品を保管するのであるう、倉庫の中などを探す事にする。

相応に隠してあるはずなので、こまごまとした場所の扉の一つ一つや、蓋や覆いをいちいち開いて探すので、時間ばかりがかかってしまう。犯人を捕まえてありかを問いただしたとしても、おそらく素直に白状しないだろう。そんな事をしている間に、間違って爆発でもしては、意味がない。

事は一刻を争うのに、隅々までくまなく探す必要がある。誰もがいら立ちをこらえながら探し続ける。ハルオも気を落ち着けようと図面の確認のために屋上の出入り口に戻ってきた。すると、

「ワン、ワンワン、ワン！」

聞き覚えのある、甲高い犬の鳴き声が響き渡った。

「こ、こてつ？ ど、どうしたんだ？」

一瞬、御子達の身に何かあったのかとひやりとする。しかし、その首輪に手紙がくくりつけられている事に気がついた。急いで外し、中を開く。

こてつの声に驚いて、香達も集って来た。共に手紙を見ると、

爆弾は屋上遊具、小熊型電動カートの座席シートの下。犯人は自爆の覚悟が出来てる。何をするか分からないから、犯人の身を安全に確保して

と、見慣れた御子の字で書かれていた。

「小熊型の、電動カート……。私が搜したところの外に出ているカートの、熊の形の物は無かったわ」

香は外に出ている遊具を一つ一つチェックしていた。

「たしか図面には、機械室の反対の部屋に、屋上遊具の保管室が書かれていたな」

こてつ組の若い男が図面を見直す。

「き、きつと、そ、そこだ！ お、表にある、し、振動の加わる遊具には、か、隠さないだろうから」

ハル才達は一目散に保管室へと向かった。

「ねえ、この隙間、何だか大きくなってない？」由美がポツリと言った。

「え？」言われて御子も気がついた。そう言えば、入って来る時は子供たちに引つ張られてギリギリ潜り込んでいたこてつが、さっきは楽々と通って行った。

あらためて見ると、だいぶ隙間が広がっている。さっきの爆発の振動で、広がったのかもしれない。

「これ、子供くらいなら、這いつくばれば、通れるんじゃないかしら？」

子供だけでも先に助ける事が出来るかもしれない。一気に希望が胸に湧く。

「だが、逆に言えば、ここにそれだけ極端な負荷がかかっていると
言う事だろう。建物全体も歪んでいるかもしれない。いつまでも安全とは限らないぞ。早く子供達をここから逃がした方がいいかもしれない」

良平は、男性店員や、従業員たちを呼んだ。事情を説明すると、
「たしかに、せめて子供だけでも脱出させた方が良さそうですね。
少しでも持ちこたえるように、上からの負荷を何かで支えましょう」
そう言つて、良平と共に男数人がかりで、ちょうど良さそうな長さの、丈夫そうな商品棚の棚板や支柱を扉の隙間に、通る空間を確保しつつも、出来る限り押し込めた。

「子供たちを集めて。支えを入れて少し狭まったが、小柄な女性でも、もしかしたら通れるかもしれない。そういう人から先に脱出してもらおう」店員は母子たちの集つているところに急いだ。

最も身体の小さそうな、若い母親に、先に潜り抜けてもらおう。窮屈そうに這って行ったが、なんとか通り抜ける事が出来た。

「これなら子供は通れる。早く、順番に潜り抜けてもらおう」

親たちにいい聞かせられて、子供たちが次々と隙間を潜り抜けていく。中には母親と離れるのを嫌がって、泣き出す子供もいたが、親の方も必死で子供を隙間に押し込める。子供も親の想いが伝わるのか、ベソをかきながらも隙間の向こうに這いだした。

さらに小柄な女性が一人、潜り抜けて行ったが、最後の女性が抜け出る時に、ギギツと上から嫌な音がした。一応支えたとはいえ、これ以上は危険かもしれない。

「真見を、早く！」

良平に促されて、御子は真見を、隙間の向こうの若い母親に託した。

「救助隊もこちらに向かっているはずですよ。途中で会えるかもしれません。慌てず、落ち着いて行つて下さい。子供たちを頼みます」

良平の言葉と、送りだした親たちの祈るような視線を受けて、二人の女性が、子供たちを連れて階段へと向かつて行つた。隙間から姿が見えなくなっても、そこに視線を送り続ける人や、その場に座つて、手を合わせる人もいる。誰もが子供らの無事を祈っているのだろう。

「あとは、救助を待つだけです」あの男性店員が良平に話かけた。「きつともうすぐ、全員助かりますよ。こんなに皆さん、落ち着いているんですから。あなた達従業員の皆さんのおかげです。皆さんの気使いでパニックも起きることなく、子供達も脱出させる事が出来た。ありがとうございます」

おかげで真見も、脱出させる事が出来た。良平は心から礼を言った。

「お礼を言うのはこちらです。あなたのように冷静な方がいるから、皆、落ち着いていられます。爆発物の時と言い、さつきと言い」「さつき？」

「さつき、子供たちを送り出すのに、ご自分のお子さんを一番最後にされましたね。あなたのような方があの場にいたから、誰も、我先にと自分の子供を優先させようと押し掛けたりしないんです。あ

の時、あなたが真つ先に我が子を助けようとしたら、動揺する人もいたと思います。あんなに小さな幼子を、あなたは冷静に最後に回した。なかなかできる事じゃありません」

気がつくと、親たちの視線が、御子と良平に集っていた。

その視線を受けて、必ず全員で無事に帰ろう。良平はそう思った。

柱の陰に隠れたとはいえ、智は爆風と埃にまかれ、しばらくはゼイゼイとせき込んだまま、その場にうずくまっていた。

まず、大きな怪我をしていないかと、身体を確かめる。幸いかすり傷一つ負っていない。間一髪だったが、間にあったらしい。

一緒にいたこてつ組の奴等は無事だろうか？ 息が整ったところで、声をかけてみる。

「おい、みんな無事か？」

「おお」

「大丈夫だ。大した怪我は無い」

軽くせき込んではいるが、全員、元気な返事が返ってきた。

見ると、幸い一人が飛んできたガラスで腕をごく軽く切った程度で、動けなくなるような怪我をしたものはいなかった。

爆発のあった所を見ると、窓と、その周辺の商品棚はひどい有様だが、建物に大した損傷はなさそうだ。これは本命の爆弾じゃなかった。まあ、もしそうなら、おそらく命は無かったんだろうが。

だが、これで本命は屋上に仕掛けるであろうことは、ほぼ、決まりだろう。ここにまだ犯人がいるとは思えないし、気配もない。御子という千里眼の女という事が正しければ、最も威力のある爆弾が、屋上に仕掛けられようとしている事になる。

「よし、俺達も屋上に向かおう」そう言っただけで智達は階段に向かったのだが……。

「あ、他に無事な人がいたのね？大丈夫ですか？」

階段から数人の子供たちを連れて降りて来た、若い女性に智達は声をかけられた。

「あんた達は、上のフロアに閉じ込められていた人か？」智は聞いた。

「ええ、ほんの少しだけ隙間があつて、潜り抜けられる私達だけが、出てこれたんです」

「そりゃ、良かった。上のフロアにはまだ、だいぶ人が？」

「二十人近い人がいます。早く救助の人が来てくれるといいんだけど」

「もう、下の方に来てるよ。ここの爆発で、すぐに上まで上がってくる。今まで、爆発物を警戒して、なかなか上がってこれなかったんだ」

そうだ。爆発物。こんな、子供を大勢連れた集団で、安全に下まで降りるのはなかなか大変そうだ。

俺はここに来るまでに、かなりの爆発物処理したから、安全に下まで降りるルートを知っている。だが、こいつらはそんな事情は知らないはずだ。

俺の役目はハルオを手伝って、こてつ会長の妻を安全に助け出す事だ。でなけりゃ、俺は華風組を追いつされる。だから俺はこんなところにいるんだ。

だが……こいつらは外で何が起こったのか、まるで知らずに出て来た。しかも女子供ばかりだ。俺が安全な道を案内すれば、こいつらは無事に外に出られる。

そんな事をすれば、組長の命令に背く事になる。華風組を追いつ出されちまうだろう。

「か、香を守るよりも、じ、自分が守ろうとした子供を、俺に守らせようとした事もある」

ハルオのそんな言葉が思い出された。あの女なら、この子供らを守る方を選ぶんだろうな。

えーい、畜生。もう、どうにでもなれ！

「悪い、俺、こいつらを下まで案内する。ハルオにそう、伝えておいてくれ」

こてつ組の組員達にそう告げると、智は子供たちの先頭に立った。

「みんな、俺の後について来てくれ。安全なルートを知ってるんだ。周りに爆発物が残ってたんだ。間違っても、周りの物に触るんじゃないぞ」

そう言っ、子供たちを先導して歩きだした。

その保管室には屋上で使われている、ありとあらゆる遊具が保管されていた。小型の汽車、特殊なブランコの座席部分、そして、電動で動く、動物型のカート。

カートは屋上の専用広場に、数台が置かれ、爆発の直前まで使用されていたようだった。だが、ここにも三台のカートが保管されていた。予備か、メンテナンスのためにしまわれていたのだろう。

カートの一台は新幹線の形を模してあった。もう一台はデフォルメされたトラのデザイン。そして、熊の親子が並んだ形のカートがあった。

親子熊のカートは二人乗り用で、大きめの熊の背中に座面があり、またいで乗る事のできる仕様になっている。その横に小さめの童顔の熊型のサイドカーが、寄り添うように取り付けられている。確かにこれは、小熊型のカートと言って間違いがない。

小熊のサイドカーの方はまたぐのではなく、背中の部分がくりぬかれたような形で、その中に座席があり、子供などがすっぽりとおさまって入るようなデザインになっていた。御子是小熊型のカートだと手紙に書いてきたのだから、このサイドカーの中の座席シートの下に、爆発物が隠されているはずだ。

誰もがそのカートに視線を向け、一斉に駆け寄ろうとしていた。

その時、

ドン！

ハルオが背中から急に突き飛ばされた。意識がすっかりカートに向かっていたので、後ろに人がいる事に気がつかなかったのだ。皆があっけに取られるうちに、小熊のサイドカーに若い男がすがりつくように飛び付いた。

こてつが香の足の下にまとわりつく。そこから伝わる振動から、こてつが震えているのが分かった。

これが犯人……。何だか驚くほど弱々しい男だった。デパートを爆破しようなんて大それたことをするような人間には、一見見えな
い。痩せて小柄な身体は、まるで中学生のようだ。

爆発の恐怖を味わう内に、いつの間にか犯人のイメージが、もつ
と、憎々しい、恐ろしい人間のように思いこんでしまっていた。
しかし、その男が顔を上げると、こてつの脅えが良く分かった。

弱々しい体つきに似合わない、ぎよつとするほど薄気味の悪い表
情が、その顔に浮かんでいた。

ただ気味が悪いだけではない。その顔は妙に年老いて見えて、若
さが感じられない。それなのに眼だけが、何かのエネルギーで燃え
ているかのように、奇妙にキラキラと輝いている。

身体、顔、表情、脅えたようなくさ。それぞれが皆ちぐはぐで、
ギャップが大きい。その奇妙さが異様な雰囲気を作り出している。
気味が悪くて近寄りがたいのだ。

そして男は薄く笑った。いや、笑ったと言うより、不自然に口角
をあげて見せたと言う方がたしかのかもしれない。それほどこの
男に笑顔は似合わなかった。その場にいた全員が、ぞつとする。

座席のシートをめくって、中からプラスチックの箱の様なものを
取り出す。蓋の部分はビニールテープでぐるぐると巻いてあった。

「よく、コレのありかに気付いたな。大したもんだ。褒めてやるよ」
良く通る、やや、張りのある声。ベテランのアナウンサーみたい

だ。だが、何故かその声に安定感がない。中音の、聞き取りやすい
声にもかかわらず、耳に入ると雑音のようにわずらわしい。

それは声に、何だか落ち着きがないからだった。そわそわとした、
早口言葉でも聞いているようで、気が落ち着かなくなる。

「変な連中がうるついているとは思ったが、甘く見ていたな。とつ
くに始末がついていたと思ったのに」

そう言って男は箱を小脇に抱えようと、持ちかえようとした。

その一瞬にハルオは動いた。猛然と男に飛びかかって行く。男は突き飛ばされ、箱から手が離れる。

香はその箱を素早く犯人から奪い去った。引きちぎるようにテープをはがし、蓋を開ける。

中にはいくつかの紙袋が入っていた。おそらくこの中には火薬が詰まっている。

「消火剤！」香がそう叫ぶと、こてつ組の組員が、消火器を箱の中に向けてレバーを握った。

消火剤は勢いよく、箱に向かって噴きつけられた。その勢いで箱の中からいくつかの紙袋が飛び出す。その飛び出した袋も、消火剤の泡にどんどん包まれていく。

犯人は顔色を変えて立ち上がり、ハルオを振りきって紙袋に飛び付いた。

消火剤の泡を払い落しながら、紙袋をかき集める。おそらくこの袋の中に、火薬が詰まっているのだろう。しかし紙袋はかなり湿ってしまったはずだ。大きな爆発は起こりにくくなったはずだ。

「いい度胸しているな。こんな乱暴な真似して、振動で起爆するとは思わなかったのか？」

本人は落ち着いて笑って見せているつもりだろうが、その顔にははつきりと動揺がうかがえた。

「お、脅したって、む、無駄だ。お、俺達、そ、そんなに馬鹿じゃない」ハルオが睨む。

「良く言っぜ。そんなに言葉をどもらせているくせに」犯人がせせら笑う。

「ど、どもり癖はもとからだ。お、お前のような奴が、と、取っておきになっている爆弾が、か、簡単に爆発したりするもんか。か、確実にお前の手に渡るまで、ご、誤爆する事がないって事は、け、見当がついた」

犯人は「フン」と鼻を鳴らすと、

「だが、俺の方が上だ。お前らの思うようになる俺じゃない」

そう言ってかき集めた紙袋を箱へと戻し、入ってきた入り口とは、別の扉から突然外へと走り出した。

ハルオ達も慌てて後を追う。犯人も必死なせいか、意外とすばしっこい。

屋上の出入り口にも向かうのかと思ったのだが、犯人は屋上の真ん中あたりへと走って行く、備え付けられている梯子の様なものを登って、さらに上に向かって行く。何をしようというのだろうか？誰もがその意を計りかねる中、犯人は何か大きなタンクの上へと上り詰めた。火薬の箱を小脇に抱え、ポケットからライターを取り出す。

「これで俺の勝ちだ。この火薬も、すべてが湿ってしまったわけもないだろう。最後の運命は、やはり、俺の手の中にあつたな」そう言つてハルオ達全員を見下ろしている。

「諦めなさいよ。もう、その火薬、爆発したつて、それほどの威力は無いでしょ？ あんた一人が爆死するのがせいぜいよ。バカなことを考えるのはやめて、さつさと自首でもしたら？」

香は犯人にそう、語りかけた。しかし、

「自首？そんな気、はなつから、さらさらないね。このタンクの中身、何だか知ってるか？コイツは燃料タンクだ。この下のレストラン街の暖房や、給湯は、コイツで賄われている。コイツごと爆発すれば、それ相応の威力はあるはずさ。やっぱり俺は、お前らより一枚上手だったのさ」

燃料タンク。それには気がつかなかった。火薬さえある程度処理すれば、安全だと思つていたのに。確かにこつちの考えが甘かつたようだ。ハルオと香は目を見合わせた。

「そつちこそ舐めるなよ。ハツタリは通用しないぜ。俺、以前はそういう機械も扱ってたんだ。この手のところのボイラーは、電気が、灯油を燃料にしているところがほとんどだ。引火しにくく、安全性が高いからな。そいつの中身はおそらく灯油だろう。そんな、揮発性や発火点の低い燃料じゃ、湿つた火薬の爆発程度じゃ、引火なんかしない」

嘘かまことか？ こてつ組の若い組員の言葉に、ハル才達は希望を持った。この言葉を犯人が信じてくれば、気が、そがれて諦めるかもしれない。

「揮発性は低くても、燃えるものは燃えるさ」

犯人もそういいながらも、顔つきに戸惑いが浮かぶ。若い組員はさらにたたみかけた。

「知ってるか？ ジャンボ機の燃料だって、特別に精製した灯油を燃料に使ってるんだ。それだけ灯油は引火のしにくい燃料なんだ。もう無駄だ。諦めろ」

ハル才達はそのまま犯人と、睨みあっていた。

その様子は、御子の脳裏にも、犯人の視点越しに見えていた。それ以上に犯人の心情がはつきりと心に浮かびあがってもいる。

「犯人とハル才達が顔を合わせてる。こてつもいるわ」

御子が屋上の状況を伝える。良平と由美が息を飲んだ。

「犯人、確実に動揺してるわ。ハル才達は犯人を追いかんぞ。これで犯人が諦めてくれるといいんだけど」御子はそう言つて、希望をひとつとしたが、犯人の次の言葉は、それを裏切っていた。

「それなら、予定変更だ」そう言つてほくそ笑む。

「そんな一般的な雑学、俺には通用しない。俺はここの事は良く知っているんだ」

そう言つたそのままタンクの裏側に飛び降りる。ハル才達も慌てて裏へと回った。

「やだ……。犯人、まだ手があるんだわ。大きな缶の蓋を開けてる」

（こいつがあつてよかった。さあ、いよいよファイナーレだ）

犯人が一気に高揚するのが分かる。心臓が大きく高鳴っているのを、本人も自覚している。

回ってきたハル才達に向き合つと、何かのバルブの様なものを回す。そして、缶をひっくり返すようにして、中身をまいた。その飛沫が大きくバルブにかかる。

「これは汚れ落としに使っているシンナーだ。燃料タンクのバルブも緩めた。確かに灯油は引火しにくいかもしれないが、ここまでやればどうなるかは誰にもわからない。この下にはレストラン街の厨房に続く、いろんな配管もめぐらされている。火を付ければ、何が起こるか分からないさ。こんな事をする奴なんて、俺以外にはいないだろうからな」

犯人は自慢げに、とうとうと述べた。まるで演説でもしているような口ぶりだ。

「あんだ、最初から、このタンクを狙って、屋上を選んだの？」

香の苦々しげな言葉に、犯人は言葉を発することなく、薄く笑って見せる。

「よ、よせ。そ、そんなことしたって、き、きつと犬死にだぞ」ハル才はそう言ったのだが、

「やってみなきゃ分かるまい。どうせ俺はここで死ぬ。だから最後の賭けさ。俺一人が死ぬのか？ それともお前らも道連れか？ どっち道、お前等は、俺の実験に付き合うよりどうしようもないんだ。お前等は俺の最後の遊び道具だ」

ハル才達は犯人に向かって語りかけている。バカな真似はよせとか、そんな考えはつまらないとか。

だが、犯人にはその声は届いてはいない。いや、聞こえてはいるのだが、それが心に届かずにいる。

それを御子は犯人の感情から感じ取っていた。すでにハル才達は、犯人の興味の外の存在になってしまっているのだ。

（これでやつと終わる。……終わらせる事が出来る）

犯人に初めて、やすらぎの心が生まれた。

その目はすでにハル才達を見てはいなかった。屋上からの街の夜景が見渡されている。

（ああ、こんな、くだらない奴らの作った世界でも、終わりは結構綺麗に見えるもんだな。今まで氣にとめた事なんかなかったんだが）

そんな事を考えながら、しばらく夜景に見とれている。

そうよ。コイツがくだらないと思っている世界は、本当はこんな

にも美しい世界なのよ。今、やっとコイツはそれを理解した。人の営みが作り出す世界の、美しさを。御子は犯人の心に向けて、思わず心で語りかける。

だから、この世界を壊そうなんて考えないで。人の命を奪おうなんて……自らの命を粗末にしようなんて考えないで。あんたは人生のいい所を、まだ、何にも知っちゃいないんだから。

しかし御子は知っている。この語りかけが一方通行である事を。

御子は人の心を読み取ることではできても、自分の心の声をこの能力で届けることは出来ないのだ。

犯人の視線が上空へと移る。犯人の心が驚くほど透明に、穢れない物に変わって行く。

（俺がここを選んだのは、タンクがあったからじゃない。俺の最後には……夜空を眺めて迎えたかったからだ。この星空の下で、すべてを終わらせたかったからだ）

そこにあつた感情は、今までの憎しみや怒りとは無縁な、穏やかなものだつた。

（俺は、これでやっと解放されるんだ。世の中からも、俺自身からも）

犯人の心に、深い感銘が広がって行く。

そうね。あんたはやっと気がついた。自分の心が自分自身を縛りつけていた事を。あとはこの、絶望する心を何とかすればいいの。やっと、人の心を手にしたんだから。

生きてさえいれば、もつといい心を手に入れられる。たとえ、その命で罪を償うまでの間だとしても、このまま今、自分に絶望したまま人生を閉じるより、よっぽどいい何かを感じる事が出来るはず。今だつたら、人として生きる時間を、あんたは手に入れられるわ！

御子は心でそう叫んだ。だが、犯人には届かない。

（夜風が気持ちいいな。初めて知った。こんな感覚。最後の最後に、こんな気持ちになれてよかった）

最後じゃないわ！ あんたの心ひとつで、まだ、続けられるのに！

（もう、恨みも、道連れも、どっちでもいいか。引火しなければ、こいつらは喜ぶんだろう。だが、もうどうでもいい。俺は解放される。それだけで十分だ）

犯人がライターに手をかける。ハル才達はこてつを連れ、踵を返し逃げ出していく。

どうでもよくない！ 考え直して！ 生きる道を選んで！

今、あんたの心は、子供のように純粹になっている。その心で、もつと生きてみて！

（世の中よ。あばよ。さよならだ。ただ、ちよつとだけ後悔するな。出来ればもつと早く、こんな気持ちで生きる時間が欲しかったな……）

ライターの火が灯る。と、同時に犯人の断末魔の衝撃が、一瞬胸に湧き、そして、御子の心から犯人の感情が、消え去った。

あとは虚空の中の、無……。

ドォーン。

音であらわすなら、そのくらいしか表現のしようがない。激しい低重音。

強い衝撃に、ハル才達は立つてはいられなかった。皆、身体を投げ出されてしまう。

屋上からは離れ、全員階段を下っていた。しかし建物の突然の横揺れに、全員壁に身体を叩きつけられた。体重の軽い香とこてつは、さらに階段を転げ落ちてしまった。

「香！ 大丈夫か！」ハル才が駆け寄る。

「いたたた。うん、大丈夫。思いつきり、お尻は打ったけどね。こてつは？」

「お、お前の上に乗ってるよ。よ、よく、と、とっさにかばえたもんだ」

こてつは香の膝の上に、驚き顔のまま固まっていた。

「へへ。実は偶然。思わずこてつを捕まえちゃったんだ。下手したらこてつを下敷きにしてたかも」

「お、おいおい」そんな気、かけらもないくせに。どこまで本気なんだか。

「うわ。凄い……」香は起き上がりながら、屋上の方を見上げた。真っ赤な炎が屋上を舐めつくしているのが見て取れる。

どうやら衝撃こそあったものの、建物は無事でいるようだ。湿った火薬では、爆発の威力はそれなりに抑えられたようだ。

しかし、やはり漏れ出た灯油に引火はしたらしい。屋上は一面火の海に違いない。

このままでは危険な事に変わりはない。とにかく下へ逃げるしかないだろう。

ハル才達は全力で階段を駆け下りていく。

激しい衝撃に、御子は身体を投げ出された。完全に犯人の心に集中していたので、全く身を守る事が出来なかった。うつぶせぎみに肩から身体を、したたかに打ってしまふ。

「御子！」良平が叫んで、御子を助け起こした。

「大丈夫か？ 頭を打ちはしなかったか？」

「……大丈夫」

本当は自分の身がどうなったのかわんて、気づいてはいなかった。犯人の死の直前に訪れた、純粹すぎる感情と、後悔。その後の生々しい断末魔。それが唐突に失われた事に、御子は、ただ呆然としていたのだ。

「どうしたんだ、御子」良平が問いかけた。

気がつくとき御子は、ボロボロと涙を流し続けていた。悲しいのか、悔しいのか、恐ろしかったのか、自分でもよく分からなくなっている。ただ、涙だけはとめどもなくあふれかえってしまっていた。

良平が心配しているのは分かっている。でも、この感情を、どう伝えるのが正しいのか、伝えていいものなのかさえ、御子には分からなかった。犯人の最後の心を共有しながら、自分は何もする事が出来ずに、ただそれを感じ続けるより他になかったのだから。

つくづくこの能力は、罪な力だと思う。どんなに他者と共感しようとも、自らの想いを相手に伝えることは、全くできない能力。こんな残酷な力を、自分と、娘はもってしまったのだ。

「大丈夫よ。気にしないで」

御子としては、そう言うしかなかった。これは誰にも理解を求める事の出来ないものなのだから。

「犯人も、爆死したわ。これで爆発物の心配はいらないわ」

涙を止めることはできそうにない。でも、少しでも冷静さを取り戻そうと、御子は言った。

良平も御子の心境の見当が付いたようで、肩を抱き「大丈夫だ」という言葉を繰り返した。

分かりあえなくても、全力で分かろうとしてくれる心が、ここにある。その、良平の気持ちがだんだん気持ちを落ち着かせてくれた。その様子を心配して、由美と、あの男性店員も声をかけてくれた。「大丈夫？ どこか痛むの？」由美は御子の身体に怪我がないかと確かめた。

「今の衝撃で緊張の糸が切れたんでしょう。無理もない。今、水をもってきます。少しは落ち着くかもしれない」

そう言って紙コップに水を汲んで持ってきてくれる。御子は水を受け取り、由美に怪我は無いと伝えたと、ようやく涙もおさまってきた。すると、

「おい……。あそこから脱出、出来るんじゃないか？」

誰かがあの防火扉の隙間を指差して言った。見るとあの隙間が一層広がって、大人も十分に通れるほどの大きさになっている。

しかし、その周辺の天井板は落ち、扉との境の壁には大きなひびが入っている。今の状態が、そう長くもつとは思えない。脱出するなら急ぐ必要がある。

「高齢の方！ 急いできて下さい！ ここから外に出られます！ 女性の方も早く！」

男性店員の声が響くと、人々が皆、駆けつけて来た。良平が御子に、

「お前も出て、向こう側の壁や天井の状態を確かめてくれ、崩れそうになったら知らせるんだ」

「わかったわ」

御子はすぐに立ち上がり、高齢の夫婦と共に、扉の向こうへ出た。出てみると扉の上の壁は、思った以上に崩れかけている。今の状態はそんなに長くはもたないかもしれない。

「急いで！ 急いで！」

御子の声が響く中、老人に続いて女性たちが脱出していく。

そこにハル才達が階段を下りて来た。

「み、御子！ ぶ、無事に、で、出てこれたのか！」

ハル才が思わず叫んだ。こても出て来た由美の姿を見つけたらしく、太めの身体で全力で由美に飛び付いた。由美はひっくり返ってしまっただが。

「今、その真つ最中よ。あんた達、ここに来るまでの安全な通り道、分かつてるはずよね？」

「あ、ああ。さ、智の奴も、さ、先にここを出た、こ、子供たちを、せ、先導して行ったらしい」

「良かった。じゃあ、あんた達もこの人たちをお願い。私と良平は最後に行くから」

そう言っている間にも、女性たちが通り終わり、男性が通り抜けて行く。そして女性の従業員たちが次々通っていたのだが、そこで良平は男性店員に声をかけられた。

「女性の次は、あなたが出て下さい」

「いや、俺は最後でいいです。あなたが先に出て、みんなを誘導してくださいと」

「そうはいきません。私はここの従業員です。それにあなた、義足を使つてらっしゃるんですよね？ そういうお客様を差し置く真似は出来ませんよ」

「それは気にしないで大丈夫です。俺、人一倍運動神経がいいですから」

そんなやり取りをする中、御子の声の高さが跳ねあがった。

「早く！ 急いで！」

ミシッ、という嫌な音に続いて、扉の上のひびが広がった。最後の女性従業員が通り抜けると、

「みんな、ここから離れて！」と、御子が叫んだ。扉の中の二人も、

外に出た人々もその場から離れた。

ガラガラガラ……

扉の周辺の壁は、大きな音を立てて崩れ落ちてしまった。隙間は埋め尽くされ、もろくなった壁と天井は、一層頼りない状態に見える。

「怪我人はいないか？ 御子、そっちはどうだ？」

瓦礫の向こうから良平の声が聞こえた。

「大丈夫、全員無事よ。そっちは？」

「こつちも無事だ。御子、ここからの脱出はもう無理だ。俺達は救助隊を待つ。お前達、みんなを連れて先に外に逃げるんだ」

御子は嫌な思いが湧き上がった。こういう時、良平はいつもそうだ。私をそばに置こうとはしない。

「みんなはハル才達に任せられるわ。わたし、ここで良平が出て来るまで待つ」

「何わがまま言ってる。お前がそこにいても、なんの役にも立たないだろう？ 早く行くんた。お前、母親だぞ。真見が待つてる」

「ここで真見を持ち出すなんてずるいわ！ 良平だって父親じゃない！」 御子は叫び返した。

「ハル才。御子の奴、今は気がかなり高ぶっているんだ。冷静な判断ができなくなってる。引っ張ってでも連れて行ってくれ」 瓦礫の向こうの良平が言う。御子は力チンと来た。

「なによ！ 良平なんて周りを助けるためなら、自分の身を守る事なんて、すぐ、諦めちゃうじゃない。そんな事だから足だって失うはめになったんだわ！ 父親になったって言うのに、ちつとも変わりやしない。この、根性無し！」

だが、今度は良平が言い返した。

「そうだ！ 俺は父親だ！ 前の俺とは違う。そうそうすぐ、諦め

たりなんかするもんか。何が何でも帰って見せる。父親と母親じゃ子供への責任の質が違う。こんなところでヒスってないで、さっさと行って真見と待ってる！」

怒鳴り返されて気がつく。そう、私達は同じ思いがある。真見を自分たちの手で育てたい。この世には分かりあえない事も多いけれど、良平とは、この強い思いを共に分かち合っている。こんな風に分かりあえるものがあるって、なんてすばらしい事なんだろう。

「大丈夫か？ 全員無事か？」その時、階段から制服姿の救助隊員たちが姿を見せた。

やった。これで良平達もここから出られるわ。御子もようやく期待を持つ事が出来た。

「良平！ お待ちかねの救助隊よ。もうすぐそこから出られるわ！」思わず声も弾む。

隊員たちに、今崩れた部分の隙間から、ほとんどの人間が出てきて、男性が二人、中に残っている事を説明する。

「この壁はもう、危険だな。反対側の丈夫な壁を、ドリルで開けて救出します。少し時間はかかるが、その方が安全だ。皆さんは先に外に向かって下さい」そういうつつ、隊員は道具の準備を始めた。

「あの、子供と女性が先に外に向かったんですが」由美が隊員の一人に尋ねた。

「それなら大丈夫。全員無事に外に出ましたよ。無線で確認が取れています。外に出れば、すぐ、お子さんたちに会えます。もうひと踏ん張りです。頑張ってください」

そういいながら隊員がほほ笑むと、親たちの表情が一気に明るくなる。

「ああ、ほら、ここに映像が出ています。みんな無事でしょう？」

隊員の指し示した小型のモニターに、子供たちの姿が映し出された。皆、食い入るように見つめる。

「智が真見を抱いてるわ。無事でよかった」香もモニターを見て言う。

「彼が子供たちを先導して出て来たんです。怪我をさせないようにかなり気を配ってくれたらしい。おかげで子供たちにはかすり傷一つないそうです」

「まあ。それは良かった。香さん、この方、御存じなの？」由美が

香に問いかけた。

「あ、えーと、その。まあ」

もともとハルオを狙っていて、ここに来るまでに脅しをかけられた相手だとは、この状況ではいいにくい。香は適当に相槌を打った。「香さんのお知り合いは、心の優しい方が多いわねえ」

由美の言葉に返事のしようもなく、香は笑ってごまかすしかなかった。

「良平、大口叩いたんだから、絶対無事に帰って来てよ。でなけりゃ、お義父さんがなんと言おうと、ウチの敷居をまたがせないからね！」御子が瓦礫の向こうに向かって叫んだ。

「そっちこそ、全員無事に帰ってなかったら、承知しないからな。ハルオ、御子を頼んだぞ！」

良平も言い返してきた。

「ハルオに頼まれるほど、私、落ちぶれてないわよ。ねえ？ ハルオ」

そう言って御子はハルオの頭をポンポンと叩く。

御子にかかっちゃ、俺、いまだにガキ扱いなんだもんない。

香の前で思いつき子供扱いされたハルオはふくれっ面をした。

香はくすくすと笑いながら、皆を先導して階段を下りる。全員がその後について行った。

「いい、奥さんですね」激しいドリルの音を背に聞きながら、男性店員が良平に言った。

「まあ。ちよつと元気が良すぎますけどね」

良平は照れながら言う。さっきまで、周りに人がいる事をすっかり忘れていた。まるで夫婦漫才を披露したような物だ。

「でも、奥さんには申し訳ないな。足の不自由な旦那さんを、ここに残す事になってしまつて」

「不自由なんてしていませんよ。足の事は本当に気にしないでいい

んです」

その時ドリルの振動のせいか、店員の頭上から天井の一部が剥がれ落ちて来た。とっさの事で店員は動けない。良平はあの可動式の特種な義足でサツと駆けつけ、店員の身体をグイッと引っ張った。

落ちた天井板は二人の横で粉々に砕け散り、店員は啞然としていた。

「ほら。これで不自由しているなんて、言える訳ないじゃないですか」そう言って良平は笑って見せた。

御子達は非常灯のわずかな明かりを頼りに、階段を下って行つた。初めは階段も瓦礫やほこりが散乱していて、集団で下って行くのは容易ではなかったが、ある程度下の階に来ると、ずっと歩きやすくなっていた。

一般客と従業員には香の先導で先に進んでもらい、高齢者には御子やハルオ、こてつ組の面々がつき添った。

何とか一階にたどり着き、全員が出口に向かっていた時、またしてもドンという、規模の小さな爆発音が上の方から聞こえて来た。

「何の爆発？ 犯人はもう、いないのに」御子が上階の良平達を気にしながら言う。

「お、屋上で、た、大量の灯油が燃えてたんだ。し、下のレストラの何かに、い、引火したのかもしれない」ハルオも心配そうに言った。

「りよ、良平なら、だ、大丈夫だ。い、今はみんなを、あ、安全に脱出させないと」

「そうね。そっちが先ね」

出口はもう、そこに見えている。この人達の安全は目の前だ。気を緩めちゃいけない。

良平は言った。前の俺とは違うと。全員無事に戻っていなければ、承知しないとも言った。私は良平との約束を守る事に専念しよう。

良平は私達が全員無事に脱出させると信じてる。私も良平が無事に戻ると信じよう。

御子達が無事に外に脱出すると、一斉にカメラに囲まれてしまった。

しかし、出て来た親たちはそんな事にはかまわず、先に待っている。

た子供たちの中から我が子の姿を求め、無事の再会を喜び合っている。その姿を各社のテレビカメラが容赦なく追っていた。

御子も真見の姿を探していると、智が御子に近付いてきた。その腕の中に真見が抱かれている。

最も幼い被害者の母親との再会。テレビカメラが幾台も自分を追っているのは分かつてはいたが、御子はそんな事、気にしちやいらなかった。一刻も早く真見の顔を見たかった。

御子が智から真見を抱き取るとカメラが一斉に近づいてくる。それを迎えに来ていた真柴の面々が、

「勝手に映すんじゃないやねえ!」「どけどけ!」と言いながら追い払う。ハルオや香と共に、人の視線から逃れると人目のつかない場所に真柴組長が立っていた。

「お義父さん。ご心配、おかけしました」

そう言つて御子は頭を下げる。すると、その頭をそのまま義父に抱えられてしまった。

「二人とも、無事でよかった……」義父は、まるでため息のようにそつと言った。

「ええ。でも、良平がまだ」御子は頭を抱えられたままそう言ったが、

「大丈夫だ。真柴の組長になろうと言う男が、こんな事で命を落としたりはせん。良平は必ず帰る」

必ず帰る。勿論、御子もそう信じていた。けれども、義父にこうして力を込めて言つてもらうと、それはより、確信に変える事が出来る。そうよ。真見もいる。お義父さんもこう言っている。

良平は、必ず無事に戻つて来るわ。

「わし達は、信じて待てばよいのだ」

私達は、真見を除いて元は全員他人だった家族だ。でも、今はどんな血の繋がった家族よりも、深く繋がっていると思う。信じあう心が強いと思う。

一人で信じるよりも、義父にこう言ってもらえるだけで、より、

強く信じられるような気がした。

「はい」

御子の返事を聞くと、義父はようやく御子を離した。御子は義父の目を見た。

「お義父さん。私達を心配してくれて、ありがとうございます」

御子はあらためて、どうしても義父に……いや、自分を育ててくれた父親に、礼が言いたくなった。

「今更礼なんていい。自分の娘と息子を心配するのは当たり前だ」
義父はいつもの照れた目でそう言った。

救助隊のドリルはようやく一点、壁の向こう側に到達した。小さな穴から隊員たちの姿が垣間見える。

「結構、この壁は丈夫だな。だが、これでは時間がかかり過ぎる。思い切って軽く爆破させた方がいいかもしれない」

ドリルの音が止んだところで、リーダー格らしい隊員の一人がそう言った。

「すいません。この壁を、ほんの少しだけ爆破して、穴を広げます。決して危険なやり方ではありません。こちらを信頼して、発破をかけさせてもらってもいいでしょうか？」

隊員は、穏やかに、諭すような口調で良平達に話かけた。これまでに爆破の危機と恐怖を味わっている事を考慮して、余計な心配をさせないようにしているのだろう。さすがはプロだ。

「勿論です。あなた方に助けていただくしか、方法がないんですから。信頼しています。皆さんのいいやり方をお願いします」

店員はすぐに即答した。この人も客商売としてはプロだった。こんな事態にもかかわらず、何よりも客の安全を優先して、いま、ここに残っているのだ。

「それでいいですよね？」店員が良平にも同意を求める。良平は深くうなずいた。

「じゃあ、この壁からなるべく離れて下さい。振動がありますので、周りや頭上にも注意して下さい」

二人がその場から離れ、商品棚に身を隠すようにすると、隊員たちは手ぎわよく作業を勧めた。

「では、爆破します。頭を守って、身をかがめて下さい」
そう、声がかかると間もなく、

「爆破！」と声がして、爆発音と軽い振動が伝わった。

壁を見てみると綺麗に人一人が楽に通れる大きさの穴があいてい

る。さすがは計算されて爆破しただけの事はあった。

残った鉄筋も、隊員たちの手によって手ぎわよく外されていく。

良平と店員がそこを通って出て来ると、互いに笑顔が広がった。

「建物の状態は安定しています。慌てる必要はありません。ただし瓦礫も多いし、足元も悪い。注意して進みましょう」

ホッとしている間にも隊員たちは素早く使っていた道具をまとめ上げて、良平達を促すように、階段へと向かって行った。

階段は薄暗くはあるが、意外に歩きやすかった。先に通った人たちによって、まるでものの道のように通りやすい道筋が出来ている。これならきつと無事に脱出できたに違いない。そう思っていると、

「先に出た人たちは外に出られたようです。全員無事です」

と、無線を握っている隊員が教えてくれた。そうか。御子達は無事か。良平の安堵の表情に、他の隊員や店員も、微笑みかけてくれた。

「私達も早く出ましょう」

そう言って隊員の歩調が少しだけ早くなる。

デパートの前では警察やマスコミでごった返す中、無事を喜び合う人たちが温かい空気が流れていた。警官がマスコミを遠ざけようとはしているが、カメラやレポーター達も、簡単にはあとにひかない。

中にはとうとうテレビレポーターに捕まって、我が子の手を握り締めたままインタビューに答えさせられている人もいる。興奮して喋り出す子もいれば、戸惑う子供を親がかばっている姿もあった。

その輪の中から少し離れた場所で、御子は良平達が出て来るのを待っていた。

テレビカメラは大多数の人と、子供たちの無事を伝えれば、それで事件の大きなヤマは終わった扱いをしている。残っているのはプールの救助隊員と、大の男二人だけなのだから。

だが、御子にしてみれば、肝心の良平の姿が見えなければ安心は

できない。あの店員の家族や、救助隊員の家族だって同じだろう。
マスコミなんて適当なものだわ。

「良平さん、まだかしらね」気がつくと思子にこてつを連れた由美が立っていた。

「もうすぐ出て来ると思うんですけどね。あの、厚い壁を砕いていたのだから、時間がかかってるんだと思います」

「真見ちゃんは？」由美は御子が真見を抱いていないのに気がついた。

「車の中でお義父さんが抱いてます。今日は特別。お義父さんにもたっぷり抱かせてあげなくっちゃ」

「真柴さんにも心配かけたんですものね」

「ホント。真見も初めての外出でこんな事に巻き込まれるんじゃないか、先が思いやられるわ。お宮参りの時には、しっかりお払いしてもらわないと」

あそこの神主は私にいい感情持っていないからな。真見まで千里眼だと知れたら、どんな顔するやら。どこか、他の神社に場所を変えようかしら？

御子はそんな事を考えていたのだが、

「あら、こんなに大きな出来事の中で、沢山の人に助けられて無事だった子ですもの。きつと、すごい強運の持ち主になるわ。それに、こんなに大きな厄落としてないんじゃないかしら？ お参りなんて必要ないくらいかも」由美はそう言っただけで笑う。

それを聞いた御子は、お宮参りの場所なんて何処でもいいような気がして来た。

確かにあの神主は自分を嫌っているけれど、真見は犯人の悪感情にも負けず、沢山の人に助けられた。厄落とは言え、これ以上の事は無いだろう。

あの神社は子供の私が育った特別な場所。神主で神様の中身(?)が変わるわけでもないだろうし。

やっぱりあそこにお参りするのが一番だろう。

そのうち由美の足元でこてつが眠たそうにすり寄り、由美に甘えてきた。

「あらあら。こてつったらオネムなのね。ちょっとだけ我慢してね。もうすぐ父さんが車で迎えに来てくれますからね」そう言っただけで軽くもないこてつを抱き上げる。由美にかかっちゃ、こてつは幼児も同然だ。

由美がそんな事をしているうちに、その、会長が由美と御子の前に現れた。

「良かった。本当に無事だったんだな」

由美とこてつの姿を見て、安堵のあまり顔じゅうが崩れたような表情をしている。

こてつの方でも由美の腕から飛び降りて、眠たげな身体ではあるが会長の傍によって、愛想のいい笑顔を見せていた。

「勿論よ。だって、こてつが大活躍してくれたんだもの。そのこてつがとっても眠そうなの。良平さんが出て来たら早く帰りましょう」こんな時でも由美の基準はこてつが中心になるようだ。

「そうだな、早く帰ろう」

会長も周りのカメラの動きを気にして落ち着かない。さつさここから離れたいのが本音だろう。

「良平ならもうすぐ出て来るわ。……あ、噂をすれば」

ついに良平や救助隊達もデパートから出て来た。良平はレポーター達に捕まらないようにコソコソしていたが、彼らのお目当ては最後まで残った従業員の、あの店員の方だったようだ。気の毒に店員はあつという間にカメラに囲まれ、良平はそのあいだをそそくさと逃げ出してきた。

最後まで使命を果たした救助隊には、カメラもレポーターも見向きもなかった。そんなものか。

「ご心配おかけしました」良平も会長に気付いて、頭を下げる。

「いや、こつちこそ由美とこてつが世話になった。ひどい事に巻き込まれて災難だったな。無事で何よりだ」

「いいえ、こちらこそ……」良平がさらに何か言おうとしたが、会長がそれを制した。

「ここはマスコミが多くて落ちつけない。真柴も心配している事だろう。早く顔を見せた方がいい。私達は失礼するよ」

そう言つて会長は由美と眠たげにふらふらしているこてつを連れて、車の中に姿を消した。

直接良平の姿を見て、御子もようやく安心した。

「ちゃんと、約束、守ったわね」

「お互いにな」

二人で目を見て微笑み返す。本当にあの場にいた全員が無事でよかった。

「さあ、お義父さんのところに行つて、真見とも顔を合わせなきゃね」

そう言つて御子は良平を車に連れて行こうとしたが、

「それはいいが、土間さんや礼似さんには無事を知らせたのか？」と良平に聞かれる。

「あ、いつけな―い。すっかり忘れてた」

「二人とも心配してるだろうに。もう、携帯もつながるだろう。知らせないと恨まれるぞ」

「はいはい。自分の携帯の電池切れたら、忘れちゃつてて」

そう言つて御子が良平の携帯を受取るうとした時、後ろから声をかけられた。

「遅い。もう来てるわよ」

振り返ると土間が智とそこに立っていた。

「あら、来てたの？ 土間」

「来てたの？ じゃないわ。心配させて。テレビを見て会長でさえ奥様を迎えに来たのよ。私だってコイツを連れて帰らなきゃ」そう言つて智の頭を軽く小突く。智は何だかシユンとしていた。

「それはそうね。ところで礼似は？」

「あんた達を助けに行くつて頑張つてたのを無理やり抑えたからね。すっかりむくれちゃつて、無事なら私に用は無いわよつて、組長室でスネてるわよ」

「あらあら。あとで機嫌を取つておかなきゃね」

「だから今夜は久しぶりに三人で飲み明かそうかと思ってるんだけど」

そう言っ土間はグラスを傾けるしぐさをしたが、

「とーんでもない！ 授乳中の母親が、そんな事できるわけないじゃない！」と、御子が驚く。

「ああ、そうね。すっかり忘れてたわ。それじゃ、礼似の機嫌はますます悪くなりそうねえ。香もかわいそうに。当たられなきゃいいけど」

「私がどうかしましたか？」

その香がハルオと共に近くにいて土間は驚いた。

「香、あんた礼似の言いつけに背いたんだから、早く謝んなきゃだめよ。礼似ったら心配し過ぎて、すっかり機嫌が悪いんだから」と、土間が都合よく香に言い聞かせる。

「分かってます。反省してます。ハルオ、あんたも土間さんに謝んなきゃ」香がハルオをつついた。

「ど、どうも、ご心配、お、おかけしました」ハルオがよそそしく謝る。

「いいえ。こつちこそ智が世話になったわ」土間も他人行儀な挨拶だ。

二人とも無事を喜び合っているはずなのに、どうもこの親子は素直じゃない。

「い、いえ。さ、智は大した奴です。じ、自分からこ、子供たちのだ、脱出を、た、助けてやったんです。か、会長の奥様が、す、すごく感激しました」

「え？ そうなの？」土間が智に振り返る。

「ええ、真見の事も助けてくれたわ。ありがとう。智」御子も智に礼を言う。

「すいません。俺、組長の言いつけ、守りませんでした。ガキ達、ほっとけなくて」智は小さくなって言う。

土間は智をしばらく見ていたが、ふつと、表情を和らげると、

「智、明日の朝、組の者を全員集めるわ。あんた、私と杯をかわすのよ。腹を決めておきなさい」

そう言って智の肩に、手を置いた。智は一瞬、ポカンとしたが、
「あ、ありがとう、ございます」と、少し呆然として、礼を言った。

「さ、帰るわよ、智」そう言つて土間は智を車に連れて行こうとする。香は土間に声をかけた。

「土間さん。出来れば私とハルオをこてつ組まで送つてもらえませんか？」

「あんだ達を？」

「早く礼似さんに二人で謝りたいんです。無事な姿も見せたいし」
そう言う香の表情は何か必死なものがある。さつき、土間が智と杯をかわすと言つた時、ハルオの顔色がわずかに変わったのを、香は見逃さなかつた。

こんな状況から生還して、肉親として互いの無事を素直に喜ぶ態度も見せず、智の正式な組入りを認める事を聞かされたら、ハルオはやっぱり面白くは無いだらう。

この、よそよそしい態度のまま、土間に帰つてしまわれるのは、香としては避けたかつた。

「いいわ、こんな時間だしね。二人とも乗んなさい」土間も何かを感じて、香の顔を立てた。

「ありがとうございます」

御子と良平も、香に頷いて見せる。肝心のハルオだけが、何だかモジモジとしていた。

「何だよ。大谷でさえ若い奴等を迎えに行つたんだ。お前もすねてないで、香を迎えに行つてやればよかったのに」

一樹のそんな台詞を礼似は仏頂面で聞いていた。

「いいのよ。あの娘、自分でここに謝りに来るだらうし、御子やハルオと無事を喜び合いたいだらうしね」

「お前だつてそうしたい癖に」

「別に」

素直じゃない。これじゃ本当に娘を嫁に出す父親のようだ。

「香、そろそろ本気になるかも」礼似がポツリと言う。

「ハルオの事か？」

「うっん。それだけじゃなくて。本気で私の妹分から卒業する事を、望み始めているのかも」

「お前がそう思うんなら、そうなんだろうな」

礼似にはそういう心を見抜く力がある。元詐欺師は伊達じゃない。心の変化に敏感なところがある。

「どんなことにも、潮時つてあるのね」

礼似はぼんやりと誰に言うでもないようにつぶやく。

「だから、今の時間が大事なんだ。つまらない意地を張るなんて何度言わせるんだ？ 脅えてたって時間は流れる。ギリギリまで香を愛おしんでやればいいんだよ」

「一樹のそういう見透かしたようなところ、嫌いよ」

礼似が一層、むくれ顔になった。一樹の方も心の中で愚痴る。

よく言うよ。見透かしてるのはどっちだって言うんだ。本当に自分の事には鈍い奴だ。

「じゃあ、もつと嫌われよう。お前はこれからさらに手放さなきゃならない事が増える。情の厚さとか、自由とか。だからいい加減気づけよ。人に任せたり、頼ったりすることは気が弱くなる事じゃない。寂しさなんて感じて当たり前だ。任せられることは俺達に任せろ。もつと素直になれ」

「寂しいのは、気が弱るからでしょ？」

「違う。人間、寂しさは必ず味わうものなんだ。どうしようもないんだよ。だから気を紛らすしかないんだ」

そっぴいながら一樹が礼似に近づいた。

「寂しい時は誰かに伝える。きっと誰かが分かってくれる。もし、それが出来ないなら……」

前と同じように、顔を近づけて来る。

「俺を頼れば、いい」

そう言っ て礼似に口づけて来る。

今度は礼似も、それを受け入れた。

車に四人で乗り込んだはいいが、土間もハルオもなかなか口を開かない。香も何から話せばいいのか分からずにいる。奇妙な緊張感を運転している智一人が不思議がついていた。

どうしてこの母子は……じゃなかった。ああ、ややこしい。「父」と子は、こつも素直じゃないんだろう？ いや。父と息子なんてこんなものなのだろうか？ 香はため息とともに頭を抱えてしまう。

「あの、組長。こんな事聞くの変なんすけど、どうして急に俺と杯をかわす気になってくれたんすか？」

口を開いたのは智だった。聞きたいのも確かだろうが、変な緊張に耐えかねたのかもしれない。

「あんた、自分より弱い者の命を大切に扱ったでしょ？ しかもその場で最も冷静な判断をした。その場の情で動いただけじゃない。自分が必要とされている事を理解していた。これはウチに必要な資質なの。ましてこれから人を傷つける道具をもつ以上は、堅気の命を決して軽んじちゃいけない。あんたは子供たちの命を守った。だから合格点をやっていいと思ったのよ」

「組長の言いつけを破ったのに、ですか？」

「誰に何を言われても、最善を尽くさなきゃならない時があるの。特に、人の命が関わっている時にはね。あんたはたとえ良い感情ではなくとも、人の命の重さを知ってる。そういう人間じゃなきゃ、ウチは刃物を握らせないの」

「じゃあ……」智は期待に目を輝かせる。

「明日から稽古をつけるわ。私は容赦しないわよ。ハルオも良く、知ってるわよね？」

「は、はい」

返事をしながらハルオは悔しさをかみしめる。智はこれから土間

さんに直接あの稽古を受けるんだ。もう土間さんの稽古はいらないと断ったのは自分なのに。

少し間をおいて、土間はハルオに語りかけた。

「ハルオ、あの稽古はあんたを随分傷つけたでしょう？」

「い、いえ」ハルオは否定しようとしたが、土間はそのまま続ける。「あのやり方があんたに合っていたのか、今でも分らないの。でも私、他に方法を知らないのよ。私の師匠だった人なら、別のやり方を考えられたかもしれないけど、私にはあれしかなかった。私は指導者には向いていないの。だけど」

ちらりと智の方を見る。

「向いていようがいまいが、私は智を何とかしなきゃならなかった。智の中に、華風に見合う気質があるか見極めたかった。それをハルオ、あんたは智から導き出してくれたわ」

「お、俺、な、何も」

「意識しては、何もしていないんでしょうね。でも、あんたは私が出来ない事やってくれた。母親の血、かもしれない」

母親の血。

この言葉は土間さんにしか、俺に言えない言葉だ。俺を生んでくれた人を、この人は誰よりも知っている。俺は、間違いなく、この人の息子なんだ。

「ありがとう。ハルオ」土間が一言、礼を言う。

「い、いいえ」

礼を言いたいのは俺の方だ。土間さんは俺に刃物を持つ心を教えてくれた。自分の弱さに気づく大切さも教えてくれた。それは同じ刃物を持つ者としての心だろう。でも、俺の気質を気遣って、母親の事を思い出してくれるのは、この人が俺の父親だからだ。

「早く私を超えなさい。その時はきっと、智があんたに追いついてるわ」

そうかもしれない。そして智の存在が、俺を強くあり続けようと

思わせてくれるに違いない。

土間さんは決してそのためだけに智を強くする訳じゃない。それは分かつてはいるが、その中に俺に対する父親としての想いが無い訳じゃないんだ。

「お、俺、つ、強くなります。き、きつと。お、俺に刃物を持たせてくれた事、こ、後悔させません」

ハルオの言葉を聞いて、土間はちらりとハルオを振りかえり、少し、ほほ笑んだ。

ハルオにも満足そうな笑顔が浮かぶ。香もようやく安心する事が出来た。

ただし、今度は智が不満そうな顔をしてはいるが。

若い頃に幾度となくかわした一樹とのキス。ふと、懐かしい思いに駆られる。でも、

「……組長相手に、いい度胸してるわね」

唇が離れて、すぐに礼似が言った。

「覚悟はできてるさ」

「これで昔に戻ったなんて、思わないで」

「いきなり減らず口か？ もう一度ふさぐぞ」一樹はそう言ったが、
「違う」

礼似の声は真剣だった。少し、一樹から離れる。

「もう、昔の私たちじゃない。一樹も、私も。昔になんか戻れない。二人とも変わっているの。昔のように安易に流されたり、立ち止まったり、時を止めるような真似、出来ないわ。これからだって変わって行く。すべて一から作り直さなきゃならない」

「それはそうだが。面倒か？」

「ええ、面倒だわ。だからずっと一人でいたんだし。それに私たち

じゃ、やすらぎは求められない。傷を癒やしあえる関係にはなれない事、一樹だつて分かつてるでしょ？」

憎み合つて、それでも惹かれあつて、無理やり別れたにもかかわらず、再会した二人だ。互いの立場や性格を考えても、穏やかな日々は望めないだろう。

だが、一樹はあきれた様に笑う。

「そんなものお前に求めないのはどんな男でも一緒だ。お前の無謀さは度胸がないからだと言つたが、本当は俺のせいだ。お前、意外と臆病なんだ。俺がお前を守つちまうと、お前、安心して無謀さに拍車がかつた。だからもう、そんな真似はしない。傷を癒やすどころか、へたすりや真剣勝負だ。気を紛らわすには最高なんじゃないのか？」

「女組長のオトコつてだけで、つけ狙われるわよ」

「光荣だね。言ってるじゃないか。覚悟はできてるって。いくらでも受けて立つさ」

ついに礼似も笑いだした。コイツ、本当にいい度胸してる。

「さすが、私のサンドバック役を買つて出るだけの事はあるわね。人を見透かす所といい、面倒くささといい、気を紛らわすには最高だわ」

「サンドバック、だけにはならないさ。今度は避ける」一樹も笑う。

「あー。やっぱりあの時殴つたの、相当効いてたんでしょ？ 駄目ねえ。サンドバックは不合格じゃない」

礼似がからかう。

「大した事、なかったさ。鍛え方が違うんだ」

一樹も負けずに、意地を張った。

「それにしちゃ、随分苦しそつたわよ。本当はアザになってるんでしょ？ ちょっと見せてみなさいよ」

「大した事ないと言ってるだろう？ あ、こら！ シャツを勝手に、めくるんじゃない！」

ハルオと香はこてつ組の前で車から降りると、土間に礼を言った。「気にしないで。ついだったんだから。ハルオにお礼も、言えなしね」そう、土間は笑う。

「それに、香。本当にありがとう。ハルオをよろしくね」

香がどう返事をしたらいいのか悩んでいるうちに、土間は智に言っ
て車を走らせてしまった。

二人で走り去る車の後姿を見送ると、

「なんか、あんたの事、頼まれちゃったみたい」香はくすぐったそうな顔をする。

「た、頼りになるよ。か、香は。お、おかげで土間さんとうまく話せたし。お、俺の方こそ、こ、これからも、よ、よろしく頼む」

ハルオに深々と頭をさげられて、香も意味もなく頭を下げ返してしまった。

二人揃って頭をあげると、そのまま目があってしまう。思わず二人で吹き出した。

「さて、礼似さんにしっかり謝んなくちゃ」香が天を仰いで言う。

「な、なんか、ご、ご機嫌斜め、み、みたいな事、ど、土間さんも言ってたな」

「一発貰うくらいは、覚悟かな。でも、時間が経ったら謝りにくくなっちゃうし」

「お、怒るのは、そ、それだけ心配してくれてた、しよ、証拠だ。お、俺、か、香を止められなかったし」

「ハルオのせいじゃないって言っても、あたしが言ったんじゃ、駄目だろうしな」

二人揃って軽いため息をついた。

「しかたがない。一発貰いに行くか」

そう言つて二人は、礼似のいる組長室に向かう。

一発と口で言うのは簡単だが、何せ礼似は馬鹿力。本気で殴られればかなりキツイ。手加減してくれる程度に落ち着いていてほしいのだが。

「一樹さん、まだ組長室にいるかな？」思い出したように香が聞く。
「い、いるんじゃないか？　お、大谷さんと、い、一緒じゃなかったし」

「じゃあ、余計に機嫌が悪いかな。礼似さん、一樹さんが苦手みたいだし」

「あ、あの二人、む、昔からの、し、知りあいなんだつて？」

「知り合いつて言うか、若い時はそれ相応の仲だったみたいよ。一樹さん、昔の礼似さんの事色々知ってるようだから、それで礼似さん、一樹さんが苦手なんじゃないかなあ？」

「じゃ、じゃあ、に、苦手つて言つても、べ、別に嫌いなわけじゃ、な、ないんだ」

「そうね。案外そのうちにくつきき直すかもね。昔からよく言うじゃない？　焼け木杭に火が着くつて」

「な、なら、か、一樹さんがいた方が、れ、礼似さんも落ち着いているかも」

ハル才は希望的な意見を言つた。何も好きこのんで殴られたいわけではない。

「オトコが近くにいてからつて、おとなしくなる礼似さんだと思う？」

「お、思わない」

香の一言で希望の火はすぐに消えた。

「一樹さんが、うまく取りなしてくれればなあ」

「で、でも、か、かえつて、れ、礼似さんを、お、怒らせそうな、

き、気がする」

「礼似さんにムチが効くのは一樹さんだけって感じよねー」

「お、俺たちじゃ、ム、ムチが届く前に、お、襲われそうだ」

二人の会話で、礼似はまるで猛獣扱いになっている。さしずめ一樹は猛獣使いだ。

57（後書き）

次話で最終回です。

バカな事を言いあううちに組長室の前に着いてしまった。ぐずぐずしていても仕方がない。早く詫びるのが一番だろう。

香は勢いに任せて思いつき扉を開いた。

「礼似さん！ ご心配おかけし……」

言いかけて香がそのまま固まった。ハルオもあんどりと口を開けてしまう。

礼似は一樹の腹部のアザを確認しようと、ベルトを引っ張り、思いつきシャツをめくり上げたところだった。一樹はそれに抵抗して片手は礼似の肩を抑え込もうと、もう一方の手はシャツを戻し損ねて、ズボンのあらぬあたりに引っ掛っていた。

こちらも二人揃って振り返ったまま固まってしまう。

「し、失礼！ しました！」

ハルオだけでなく、香まで仲良くともって乱暴に扉が閉まる。バタバタと派手な足音を立てて二人はそこから離れたようだ。

「これは…… 誤解を招いたかしら？」 礼似の方まで啞然としている。
「これの、どこが誤解なんだ？」

シャツをつかまれ、半裸のまま一樹はうんざり顔をした。これじゃ、俺の方が襲われたように見える。いや？ 襲われたのか？

「一樹が素直に見せないからじゃないの」

「急に男のシャツをめくる、お前の方がどうかしてる」

「いいじゃない。どうせ一樹なんだし」

「どうせとは何だ、どうせとは」

礼似は一樹の言葉を聞いてはおらず、腹部に視線を落とした。

「あー！ やっぱりアザになってる。しかもこぶし型にくつきり！」
礼似是嬉しそうな声を上げた。

「人にアザ作っておいて、そんなに嬉々とした声を出すな。この調子じゃ、すぐ、俺もお前に落とされたクチにされる。俺の面子はどうなるんだ！」

「あら、覚悟はできてるんでしょ？ 私の相手をしようってんなら、面子なんて真っ先に立たなくなるに決まってんじゃない。ヤワな事言っでないで、人の噂も受けて立つてもらわなくっちゃ」

そんなところまで、まだ、覚悟してないぞ！

「でも、一応誤解は解いておくわ。二人とも、まだ組の中にいるかしら？」

そう言っで礼似是部屋を出ようとしたが、一樹は扉の前に立ちふさがった。

「何？」礼似是そう聞いたが、こっちだって、もうヤケだ。

「どうせ誤解を解いたって、すぐ噂になるだろう。だったらこのまま、誤解じゃ無くせばいいだろう？」

そう言っで、礼似を誘う。

ただし、心の中で、これで俺の「男」の価値は、かなり暴落するんだろうな、と思うと、一樹は色気のない方のため息をついてしまった。

完

58（後書き）

おかげさまで完結出来ました。ご愛読、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4051v/>

こてつ物語10

2011年8月30日12時17分発行